

超人鬚野博士

夢野久作

青空文庫

吾輩のこと

……何だ……吾輩の身みのうえばなし上話を速記にして雑誌に掲載するから話せ……と云うのか。
 フウム。それは話さん事もないが、しかし、選よりに選つて又、吾輩みたいなルンペン紳士……乞食と泥棒あいの間の子みたいな奴の話を、雑誌に公表する必要がドコにあるのかね。
 吾輩以上に立派な地位あり、名誉ある人間が、天の星の如く、地の砂の如く天下に充満しているではないか。そんな奴とは正反対に、どこにでも寝る、何でも着る、何でも喰う、地位とか、家柄とか、人格とかいうものが一つも無い点に於いて天下広しいえじと雖も、吾輩ぐらい不名誉な人間は無いだらう。そんな薄見うすみつともない人間の話が問題になるのかね一体……エエ……何だと……？

しかし吾輩はソナにも有名なのかノー……。

フーム。有名にも何にも「鬚野博士ひげの」の名前を知らない者は日本中にタダの一人も居ない。吾輩が日本に存在しているために英国も、米国も、露西亞ロシアも、日本に挑戦し得ないでいる。日露戦争以後に吾輩がドンナ科学的の発明を日本の軍部に提供して、ドンナ新鋭の

武器を内々で取揃えさしているか判明わからないから……成る程のう……それは事実だ。毛唐けとらうの奴等もよく知つとるのう。白露戦争の時にヨツポド懲こりたと見えてアラユル密偵スパイを使つて吾輩の身みのまわり辺を探らせているらしいてや。事によると現在、海軍で作りよる一人乗、魚形水雷ボートが吾輩の発明である事を探り出しとるかも知れんのう。ナアニ、饒舌しゃべつても大丈夫だよ。毛唐が真似して作つても乗る奴が一匹も居る氣遣いが無いし、防禦ぼうぎよの方法が全く無いんだからね。時速百二十節ノット、航続距離二万海里かいりと云つたら大抵わかるだろう。その動力が問題なんだからね。その動力が将来の日本軍のタンク、飛行機に十倍以上の能率を上げさせるんだから恐ろしいだろう。日本国民たるもの枕を高うして可なりだ。つまり吾輩の人格が、全人類を押し付けている……吾輩が、こうしてボロマントを着て、ハキダメから拾つた片チンバの護謨靴ごむを引きずつて、往來をウロウロしている限り世界の外交界はこの「鬚野房吉博士」の存在を無視する訳に行かんと考えている……吾輩を目して新興日本のマスコット……松岡全権以上の偉人として恐れ戦おのいでいると云うのか……。アツハツハツハツハツ……宜しい。大いに宜よろしい。氣に入つたぞ。それでは一つ吾輩の正体を明らかにして全世界三十億の蛆虫うじむし共をパンクさせてくれるかな。とにかく向うの草原くさばらへ行こう。あの大きな土管の中で話そう。イヤイヤ。原稿料なんか一文も要らん。

上等の日本酒と海苔のりと醤油があれば宜しい。鮓はやの生乾なまびが好きなんだが、コイツはちよつと無かろうて……。

感化院脱出

世間の奴はよく吾輩をキチガイキチガイというが、その位のこととはチャンと考えているんだよ。吾輩の過去といたつて極めて簡単だ。両親の名前や顔は勿論のことそんなものが居たか居なかつたかすら知らないんだから多分、精神的にも物質的にも生れながらのルンペンなんだろう。孫悟空と同じに華果山カカサンの金の卵から生れた事だけは確實……だろうと思ふんだが……アハハ洒落しゃれじやないよ。

それから十四としの年としに〇市の感化院を脱出ぬけだして無一文で女郎買めいいに行つた。ドツチも喜ぶ話だから多分、無料ただだろうと思つて行つたのが一生のアヤマリ。女郎屋の敷居またを跨またがないうちに吾輩の帯おび際ぎわを捉とらえて、グイグイと引ひっぱり戻もした奴が居る。鯉こいのアタリよりもチツト大きいなと思つて振返かえつてみると、タツタ今表口いまのうらぐちに立つて……イラツシャイイラツシャイをやつていた豚ぶたみたいな男だ。感化院を出がけに兄貴あにいもうと分ぶんから注意ちゆういされて来た牛太ぎゆうた

郎ろうという女郎屋の改札掛がかりはコイツらしい。聞いた通りに派手なダランダラの角帯かくおびを締め
ていやがる。

「オイ、兄さん。銭ぜにを持っているかね」

と云ううちにその改札屋が吾輩の襟番号えりをジツと見やがった時にはギョツとしたね。
アンマリ気が急せいでいたもんだからウツカリして引剥ぐのを忘れていたもんだが、見破ら
れたと思つたから吾輩はイキナリ焼糞やけくそになつてしまった。

「馬鹿。銭があつたら嬢かあを持つワイ。感化院の房ふさごう公を知らんケエ」

とタンカを切つてやつたら牛太の奴吾輩の襟首つかを掴んでギューギューと小突きまわした。
序ついでに拳固げんこを固めて吾輩の横よこ面を一つ鼻血の出る程く啖くらわしたから、トタンに堪忍袋の緒
が切れてしまった。さもなくとも燃え上るようなホルモンの遣やり場に困っている吾輩だ。
襟首を掴んでいる牛太郎の手の甲をモリモリと噛み千切りちぎりざま、持つて生まれた怪力でも
つて二十貫ぐらいある豚野郎を入口の塩しお盛もりの上にタタキ付けた。それから失恋のムシヤ
クシヤ晴しに、駈付けて来た二三人の人相の悪い奴を向うに廻わして、下駄を振上げてい
るところへ、通りかかった角力取すもうとりの木乃伊ミイラみみたいな大きな親爺おやしが仲はい入いつて止めた。
止めたといつてもその親爺が無言のまま、片手に吾輩の襟首を掴んで、喧嘩の中から牛蒡ごぼう

抜きに宙に吊るしたまま下駄を穿かしてくれただけで万事解決さ。相手のゴロツキ連中もこの親爺の顔を知っていたと見えて、猫みたいにブラ下がっている吾輩に向ってペコペコお辞儀していたが、可笑しかったよ。

それからその親爺に連れられて、そこいらの河ッ縁の綺麗な座敷に通されてみるとイヨイヨ驚いたね。その親爺が坐つていても吾輩の立つている高さぐらいあるんだ。どこで胴体が継足してあるんだろうと思つて荒っぽい縞のドテラを何度も見上げ見下した位だ。おまけにツルツル禿の骸骨みたいに凹んだ眼の穴の間から舶来のブローニングに似た真赤な鼻がニューと突出ている。左右の膝に置いた手が分捕スコップ位ある上に、木乃伊色の骨だらけの全身を赤い桜の花と、平家蟹の刺青で埋めているからトテモ壯観だ。向い合っているうちに無料でコンナ物を見ちや済まないような気がして来た。

そこで吾輩は生れて初めて鰻の蒲焼なるものを御馳走になったが、その美味かったこと。モウ吾輩は一生涯、この親分の乾児になつてもいいとその場で思い込んでしまつたくらい感激しちやつたね。

それからポツポツ様子を聞いてみると、その木乃伊親爺の商売は見世物師なんだそう。成程と子供心に感心仕つたね。

「へエ。オジサンが見世物になるのけエ」

と訊いてやったら、義齒いればを爪つまんでいた親爺が眼を細くしてニコニコした。ピストルの頭を分捕スコップで撫でまわしながら吾輩わが輩に盃を差した。

「……マアマア。そんげなトコロじゃ。どうじやい小僧。ワシは軽業かるわざの親分じゃが、ワシの相手になつて軽業がやれるケエ」

「軽業でも、手品でも、カツポレでも都踊りでも何でもやるよ。しかしオジサン。力づくでワテエに勝てるけえ」

「アハハハ。小癩こしゃくなヤマカン吐つきおるな。木乃伊ミイラの鉄五郎を知らんかえ」

「知らんがな。どこの人かいな」

「この俺の事じゃがな」

「ああ。オジサンの事かい」

「ソレ見い。知つとるじやろ。なあ」

「知らんてや。他人のような気もせんケンド……ワテエは強い。砂俵の一俵ぐらい口で啣くわえて行くで……」

「ホオー。大きな事を云うな。その味噌ツ歯で二十貫もある品物が持てるものかえ」

「嘘やないで。その上に両手に一俵ずつ持つてんのやで……」

「プツ……小僧……酒に酔うてケツカルな」

「ワテエ。酒に酔うた事ないてや」

「そんならこの腕に喰付いてみんかい」

木乃伊ミイラの爺さん一杯機嫌らしく、片肌を脱いで二の腕を曲げて見せると、真四角い木きちん

賃宿やどの木枕こまくらみたいな力ちから瘤こぶが出来た。指さで触さわつてみると鉄と同じ位に固い。

「啖くいつ付いても大事ないかえ」

「歯が立つたなら鰻もを今一パイ喰わせる……アイタタタ……待て……待てチウタラ……」

廊下を通りかかった女中が吃驚びっくりしたらしく襖ふすまを開けたが、木乃伊親爺ミイラの二の腕に付い

てる濡れた歯型を見ると、呆氣あつけに取られたまま突立っていた。

親爺は急いで肌を入れた上から二の腕うでを擦さすった。吾輩わがに喰付くいつかれたが、嬉しいらしく女

中を振返つてニコニコと笑った。

「……鰻を、ま一丁持つて来い。それからお爛かんも、ま一本……恐ろしい歯を持つとるのう。

ええそれから……そこで給金の注文は無いかや……」

「無いよオジサン。毎日鰻を喰べて、女郎買ぢやうかいに行かしてもらいたいだけや」

木乃伊親爺は口をアングリ開いたまま、眼をシヨボシヨボさせていたが、それで話がきまったらしかつた。

少年力持

それから後、三四年ばかりの間、吾輩は毎日毎日、お祭りの見物の中で、生命がけの芸当をやつた。金ピカの猿股一つになつた木乃伊親爺の相手になつて、禿頭の上に逆立ちしたり、両足を捉まえて竹片みたいにキリキリと天井へ投げ上げられたり、バスケットボールみたいに丸くなつて手玉に取られたりするのであつたがトテモ面白かつた。吾輩みたいな身体を不死身と云うのだろう。イクラ遣り損なつて怪我をしても痛くもなければ血も出ない上に、すぐに治癒する。見物の眼に決して止まらないから便利だ。しまいには木乃伊親爺がヤケになつたらしく、吾輩を掴まえて死ねかしの猛烈な芸当をやらせ続けたが、どうしても死なないので驚いているらしかつた。

そればかりじゃない。吾輩は別にタツタ一人で時間つなぎに少年力持をやつた。自動車に轢かれたり、牛の角を捉まえて押しくらをしたり、石ころを噛み割つたり、鋳力を

引裂いたりする片手間に、振袖を着た小娘に化けて……笑つちやいけない、これでも鬚ひげを剃ると惚れ惚れするような優やさおとし男だぞだぞ……手品の手伝いみたいなものを遣っているうちに、困った事が出来た。

……というのはホカでもない。前にも云つた通り、コツコツの木乃伊親爺ミイラと、その頃まではまだ紅顔の美少年だった吾輩が組んで、大車輪で演出する死物狂いの冒険軽業が、吾輩の第一の当り芸であると同時に、この一座の第一の呼物であつたんだが、その芸当の最中の話だ。毎日毎日一度宛すつ、芸当の小手調べとして親爺と揃いの金ピカの猿股を穿いた丸裸るはだか体の吾輩が、オヤジの禿頭の上に逆立ちをする事になつていたんだが、そいつを毎日毎日繰返しているうちに、そのオヤジの禿頭のテツペンにタツタ一本黒い、太い毛がピンと生えているのに気が付いたもんだ。

世の中というものは妙なものだね。その黒い毛の一本が、木乃伊親爺ミイラの生命いのちの綱で、この一座の運命の神様だった事を、その時まで夢にも気付かなかつた吾輩は、その毛を見るたびに氣になつて氣になつて仕様がないうようになった。第一いつ見ても真直にピインと垂直に立っているのが不思議で仕様がないう。伸びもしなければ縮みもしない。波打ちも、倒おれも、折れも曲りもしないのだから癩しやくさわに障る。第二に、ほかの処ところに生えている毛はミ

ンナ真白いののに、この毛一本だけが黒いのだから怪しからん。まるで外国の廻わし者みたいな感じだ。最後に気に入らないのは、その毛の尖端が、ちようど避雷針みたいに、吾輩の鼻の頭と真向いになっている事で、逆立ちをするたんびにその毛を見ると、鼻の頭が思わずズーンと電気を感じて来る。何だつてこのオヤジはコンナ気まぐれな毛をタツタ一本、脳天の絶頂にオツ立てているのだろうと思うと、寝ても醒めても苦になって、イライラして仕様がなくなつた。しまいには毎日一度宛その禿頭の上で逆立ちするのが死ぬ程イヤになつて来た。

そこで吾輩はトウトウ決心をして或る日の事、幕前の時間を見計らつて木乃伊親爺に談判してみた。

「親方。ほかの芸当なら何でも我慢するが、アノ親方のアタマの上の逆立ちだけは勘弁してくれんかい」

親方は面喰らつたらしかつた。赤い鼻をチヨット掴んで眼を丸くした。

「何で、そんな事を云い出したんかい」

吾輩は頭を搔いた。マサカにタツタ一本の毛が恐ろしく、逆立ちが出来ないとは云えないからスツカリ赤面してしまつた。

「何でチウ事もあらへんけんど……アレ位のこと……アンマリ見易うて見物に受けよらんけに、止めとうなつたんや」

「馬鹿奴え。何を吐きくさる。ワレのような小僧に何がわかるか。あの逆立ちは芸当の小手調べチウて、芝居で云うたらアツリ三番叟や。軽業の礼式みたようなもんやけに、ほかの芸当は止めてもアレだけは止める事はならん。それともこの禿頭が気に入らん云うのか」

と云ううちにオヤジは渋臭い禿頭を吾輩の鼻の先に突付けて平手でツルリと撫でて見せた。それにつれて頭の上の黒い毛がピインと跳ね返って吾輩の鼻の頭に尖端を向けた。トタンに吾輩の全身がズーンとして、お尻の割れ目がゾクゾクと鳥肌だつて来た。

吾輩は、思わずその禿頭を平手で押除けた……と思つたが、気が付いた時には、楽屋の荒板の上に横たおしにタタキ付けられていた。アトから考えると親方の虫の居処がその日に限つて日本一悪かつたらしいね。

それから間もなく二人は、満場の喝采を浴びて見物の前に跳り出た。むろんその時はタツタ今の経緯も何も忘れて、僅かの時間、親方の頭の上で辛抱する気になつていたもんだが、その中に例の通り、禿頭の上で逆立ちをしてみると……妙だつたね。

その時の気持ばかりは今から考えてもわからないんだが、アレが魔が差したときでもいうもんだらうかね。ツイ自分の鼻の先に突立っている毛の尖端さきを見ると、自分では毛頭ソナ気じやないのに、両手がジリジリと縮んで、赤茶色の禿頭肌はげはだが吾輩の唇に接近して来た。そうして、やはり何の気もなく、その禿はげのマン中の黒い毛を糸切歯の間にシツカリと挟んでグイと引抜いたもんだ。

「ギヤアツ……ヤラレタツ……」

と云う悲鳴がどこからか聞こえたように思ったが、全く夢うつつだつたね。吾輩の小さな身体が禿頭の上から一間ばかり鞠まりのようにケシ飛んで、板張の上に転がっていた。ビツクリして跳ね起きてみると、直ぐ眼の前のステージの上に、木乃伊ミイラの親方がステキもない長大な大の字を描いて、眼を真白く剥むき出したまま伸びている。ゴロゴロと喘ぜんめい鳴を起していたところから考え合わせるとあの時がモウ断末魔らしかったんだがね。

アトから聞いたところによると、親方の木乃伊ミイラ親爺は平生から吾輩を恐ろしい小僧だ恐ろしい小僧だと云っていたそうだ。感化院から出て来たばかりの怪物だから何をするか、わからない奴だ。気に入らないと俺の咽喉のどぶえ笛でも何でも啖くい切りかねないので、毎日毎日俺に手向い出来ない事を知らせるつもりで、思い切りタタキ散らしてやるんだが、実は恐

ろしくて恐ろしくて仕様がなから、ああするんだ……と云っていたそうだが、してみると吾輩が毛の根をチクリとさせたのを親方は、吾輩が例の手で禿頭のマン中へカブリ付いたものと思つたらしいね。その後の医師の診断によると、老人の過労から来る、急激な神経性の心臓痙痺まひというのだったそうだが、実に意外千万だったね。そんな馬鹿な事がいつたつて、木乃伊ミイラの親方は、総立ちの見物人と、楽屋総出の介抱と、吾輩の泣きの涙の中に、ホコリダラケの板張りの上で息を引取つたのだから仕方がない。

ところで問題は、それからなんだ。楽屋に運び込まれた親方の死骸に取付いてオイオイ泣いているうちに、片っ方で仲間を集めてボソボソ評議していた拳固げんこの梅という奴が、いつの間にか立上つて来て、何も知らない吾輩の横つらつ面をガアンと一つ喰らわしたもんだ。

このゲンコの梅という奴は、ずっと前に大人の力持をやって相当人気を博していたもんだが、アトから来た少年力持の吾輩に人気を漑さらわられてスツカリ腐り込んでいた奴だ。むろん糞くそ力がある上に、拳固で下駄の歯をタタキ割るといふ奴だったから痛かつたにも何にも、眼の玉が飛び出たかと思つた位だった。だから、いつもの吾輩だったら文句無しに掴みかかるところだったが、親方の死骸を見て気が弱っていたせいだったろう、起上る力も無いまま莫塵ぼじんの上に半身を起して、仁王立におうだちになつている梅公のスゴイ顔を見上げた。見

ると吾輩の周囲には、梅をお先棒にした座員の一同が犇々と立ちかかっている様子だ。これは前に一度見た事の在るこの一座のマワシと違って一種の私刑だね。それにかかる準備だとわかつたから、吾輩はガバと跳ね起きて片頬を押えたまま身構えた。

「……ナ……何をするのけえ」

「何をするとは何デエ。手前が親方を殺しやがったんだろう」

「親方の頭のテツペンから血がニジンでいるぞ」

「あしこから小さな毒針を舌の先で刺しやがったんだろう。最前殴り倒おされた怨みに……」

「ソ……そんな事ねえ……」

「嘘吐け。俺あ見てたんだぞ……」

吾輩は実をいうとこの時に内心頗る狼狽したね。タツタ今齒で引抜いた黒い毛は、どこかへ吐き出すか嘸込むかしてしまっている。よしんば齒の間に残っていたにしたところ、アンナ黒い毛がタツタ一本、親方の禿頭の中、中央に生えている事実を知っていたものは、事によると吾輩一人かも知れないのだから、トテモ証拠になりそうにない。のみならずコンナ荒っぽい連中は一旦そうだと思ひ込んだら山のように証拠が出て来たって金輪際、

承知する氣づかいは無いのだから、吾輩はスツカリ諦らめてしまった。コンナ連中を片端からタタキたおして、逃げ出すくらいの事は何でもないとも思ったが、親方の死骸を見るときに勇氣が挫けてしまった。

「……ヨシ……文句云わん。タタキ殺してくんな。……その代り親方と一所に埋めてくんな」

「……ウム。そんなら慥かに貴様が親方を殺したんだな」

「インニヤ。殺したオボエは無い」

「この野郎。まだ強情張るか……」

と云ううちに、青竹が吾輩の横つ腹へピシリと卷付いた。

「警察へ渡す前に親方のカタキを取るんだ。覚悟しろ……」

「何をツ」

と吾輩は立上った。親方のカタキという言葉が吾輩を極度に昂奮させたのだった。

鞭だの青竹だの丸太ん棒だの、太い綱だのが雨霰と降りかかって来る下を潜った吾輩はイキナリ親方の死骸を抱え上げて、頭の上に差上げた。

「サア来い」

これには一同面喰つたらしい。獲物が無いと思つてタカを括つていた吾輩が、前代未聞のスゴイ武器を振り翳したのだからね。一同が思わずワアと声を揚げて後へ退つた隙に吾輩は、そこに積上げて在るトランクを小楯に取つて身構えた。ドイツコイツの嫌いは無い。一番最初にかかつて来た奴を親方の禿頭でタタキ倒おしてやろうと思つているところへ、思いがけない仲裁が現われた。

未亡人に救われて

それはこの頃、毎日のように正面の特別席の中央に陣取つて、座員全部の眼に付いていたお客で、あれは西洋人だろうか、日本人だろうか……お嬢さんだろうか、それとも奥さんだろうかと問題のタネになっていたシロモノであつたが、近付いて来たのを見ると、何というスタイルの洋装か知らないが、その頃では眼を驚かすハイカラであつたらう。真赤な血のような色をした下着に、薄い、真黒い上服をピッタリと着込んで、丸い乳と卵型のお尻をタマラナイ流線型にパチパチと膨らましている。それが白い羽根付きの黒いお釜帽からカールをハミ出させて、白靴下のハイヒールの上にスラリと反り返つて、縁

無しの鼻眼鏡をかけたところは、ハンカチの箱から脱出ぬけだして来たような日本美人だ。年は二十ぐらいに見えたが、実は二十五か六ぐらいだったろう。見物席からイキナリ駈かけあが上つて来たらしく頬を真赤にしてセイセイ息を切らしていたが、吾輩が振翳ふりかざしている死骸なんかには眼もくれずに、ハンドバッグの中から分厚い札束を掴み出すと、みんなの鼻の先へビラビラさせて見せまわしながら、ニツコリと笑った。銀鈴なまのような嬌めかしい声を出したもんだ。

「……サア……皆さん。この坊ちゃんを妾わたしに売って頂戴。千円上げます。ちょうど今日中の上り高だかぐらいあるでしょ。親方へ上げる妾の香こう奠でんよ。ね……いいでしょ……いけないの……。いいわ。どうしてもこの坊ちゃんを殺すと云うんなら、妾にも覚悟があるわ。御覧なさい。この小ちやな七連発のオモチャに物を云わせますから……妾はこの坊ちゃんに惚れてるんですからね。そのつもりで話をきめて頂戴……サアサア。警察サツが来ると話が元も子も無くなるわよ。サアサア。早いとこ早いとこ。オホホホホホ」

みんなこの別嬪べっぴんさんに吞まれてしまったらしい。イツの間にかメイメイに持っていた獲物を取落していた。吾輩もソロツと親方の死骸を下して額の汗を拭いていた。

こうなると話は早い。廿分と経たないうちに、金モール付赤ビロードつきの舞台服を着た吾

輩は、今の別嬪さんと一緒に、その頃まで絶対に珍らしかった自動車に同乗して、どこか郊外の山道らしい処をグングンと走っていた。つまり吾輩はこの、日野亜黎子ひのありこという金持の未亡人に買取られて、郊外の別荘に匿かくまれて、その未亡人のハンドバッグボーイにまで出世したもんだ。禿頭のオモチャから一躍、別嬪のオモチャにまで出世した訳だね。

イヤ、出世だよ。たしかに出世だよ。墮落じゃないよ。第一きゆう昨日までは毎日何度となくタタキ店の瀬戸物みたいに荒板の上にタタキ付けられていた奴が、今日は正反対に真綿まわたづくめの椅子やクシヨンの上でフワフワフワフワと下にも置かず歓待される訳だからね。人生は京の夢、大阪の夢だ。電光朝露でんこうちようろ応作おうさく如是によせかん観だ。まあ聞け……そんな経緯わけで吾輩は、その未亡人の手に付くと、お母さんだか妹だか訳のわからないステキな幸福に恵まれながら学問を教おそわった。吾輩を立派な青年紳士に仕立てて見せるといふ未亡人の意気込みでね……何でもその日野亜黎子夫人の旦那様だった男は、日野有三九ひのうさくという名前でチャチな探偵小説を書いて、巨万の富を積んだあげく、妻君の精力絶倫に白旗を揚げたような……そうして揚げたくないような神経衰弱の夢みたいなエタイのわからない遺書を書いてアダリン自殺を遂げた。自分が探偵小説になっちゃったというダラシのない男だったそうだが、そのお庭の片隅に立っている図書館の中には美事な寢室を作って、あらゆる科学書類、

百科辞典、歴史、法律書、小説の類が山積していた奴を、吾輩は未亡人との恋愛遊戯の片手間に一字一句残らず暗記してしまったものだ。アベコベに未亡人を手玉に取ってやったワケだね。嘘だというなら エンサイクロペジャ・ブリタニカ 大英百科全書のドノ巻のドノ頁の第何行目に、何が書いてあるか質問してみろ。即答して見せるから……。ソレ見ろ……。

そこで世界の大勢に通じた吾輩は科学なるものに非常な興味を感じたね。早速亜黎子未亡人に甘たれてその図書館の中に立派な実験室を作ってもらった。その実験室で吾輩は超チヨウエツチエ

越智という毛唐人が発見した脂肪の分解剤を逆に分解して、有効成分だけを取り出し、そいつを応用して動植物の脂肪や油をドン底まで分析し、ダイナマイトに数十層倍する猛烈な液体火薬を作り出す事に成功した。

その時は嬉しかったね。まるで世界を征服したような気持だった。あんまり嬉しかったもんだから吾輩はその爆薬の製法を極秘密のうち中に日野亜黎の名前で海軍省に投書した後に、その実際の効果を証明するために、その亜黎子未亡人と合意の上で爆薬情死を企ててやろうと考えたもんだ。むろんその時分には二人とも青春なんかドツカへ行っちゃって貧乏く屋の股ずや引ももひきみたいに、無意味に並んでいるだけの状態だったからね。吾輩の考えなんか知らない未亡人は、今の内閣と政党みたいに心中しまししょうよ、しまししょうよって毎日毎日

うるさく吾輩に甘たれていたもんだから無論、異存は無かつたらうよ。そこでその火薬の話を打ち明ける前に、取りあえず骨休めかたがた、吾輩は娑婆しやばの見納めのつもりで或夕方のこと、下町のバアへ一杯飲みに行つているとその留守中に、その実験室が大爆発してしまつたのには驚いたね。否いや。実験室どころじゃないんだ。二町四方もあるかと思つていた日野家の屋敷内に在る鉄筋混コンクリート凝土の家作と立木なんか、地の下数千坪の土砂や、女中や、自動車や、未亡人と一緒に大空に吹上げられてしまつた……らしいんだ。その時分には酒場でグデングデンになつて狸のきんたま丸の夢か何か見ていたもんだから吾輩は全く知らなかつたんだ。

むろん新聞に出ているよ。君等が生れない前の初号三段抜きだから、今で云つたら号外ものだろう。……亜黎子未亡人の前の夫、日野有三九という男は生前に非道ひどい神経衰弱にかかつていた者だが、自分の死後、精力絶倫の亜黎子夫人が必ず不倫の行跡に陥るべきを予想し、嫉妬の念に堪たえず、これに対する深刻な復讐の準備を整えていた。すなわち自分の建てた図書館内の豪華を極めた寝室に、自分の死後三年目の或る夜半に相違なく発火するように工夫した精巧な時計仕掛の爆薬を装置していたものであるが、そのような事実を夢にも知らなかつた淫婦の亜黎子は、亡夫の予想通りに有名なる曲芸師の不良少年をその

室へやに引っぱり込み不義の快樂に耽ひたつていた結果、まんまと首尾よく亡夫の詭計きけいに引つかか
 ったのが、この大爆発の真相に相違ないのである。敏腕を以て聞こえた当局も、流石さすがに斯か
 様な超特急の椿事ちんじに遭遇しては呆然ぼうぜんとして手の下しようもなく……云々……といったよ
 うな事を筆を揃えて書立てていたが、流石さすがの吾輩もこの記事を見た時には文字通り呆然、
 哑然としてしまったね。日本の新聞記者が、これ程までに素晴らしい作家だとはこの時
 まで気が付かなかつたからね。

……ナア二……あの実験室に立入る人間は亜黎子未亡人だけだからね。多分、彼女が吾
 輩の留守中に眼を醒まして、吾輩が作り溜めていた液体火薬に手を触れるかドウかしたん
 だろう。アルコールに溶いた甘ったるい、赤黄色い火薬を、ベルモットの瓶びんに詰めて、塩
 と氷に詰めて冷蔵しておいたんだから、事によると酒と間違えて未亡人が喇叭ラッパを吹いたの
 かも知れない。そいつが腹の中の体温で発火してアレヨアレヨと驚くトタンに、三町四方
 の靈魂がフツ飛んだんだから思い残す事は無いだろう。もちろん吾輩もアンナに猛烈な炸
 裂力を持つていようとは思わなかった。分量が二倍の時には四倍の熱……四倍の時には二
 百五十六倍の高熱を発する事だけは知っていたがね。アトでその爆発の遺跡あとをコツソリと
 見に行つた時には文字通り「人間万事夢だ」と思つたね。直径二三町、深さ二十間ぐらい

の摺鉢形すりばちがたの穴が残っていただけだからね。それ以来何もかも夢だという事をハッキリ自覚した……女ばかりじゃない。人間万事が何一つ当てにならない事を自覚した吾輩は、越えつちゆうふんどしひも中ちゆう禪ぜんの紐ひもが切れたみたいな人間になつてしまった。する事な為なす事が、一つも手に附かない。面白くも可笑おかしくもないが、そうかといつて死にたくも生きたくもないといったようなアンバイでブラリブラリやっている中うちに、イツの間にか現在の職業に転落して来ると又、世の中がチツトずつ面白くなつて来た。

何しろ世間の人間が殆んど氣附かないでいて、ステキに儲かる商売だからね。又氣付いたにしたところが、滅多めったに手を出せる商売でもないんだがね。イヤ。詐欺でも泥棒でも、乞食でも何でもない。そんな間まだるつこいヘゲタレ商売とは夕チが違ちがうんだ。詐欺と泥棒と乞食の上を行く商売だ。毎日毎日往来を歩きながら、オール日本人の生命いのちの綱を握つていようという、警察でも大学でも吾輩の前には頭かぶが上らない上に、毎日美味うまい酒が飲めようというんだから大した商売だろう。

……そんなドエライ商売がどこに在るか……ここに在るんだ。この破れマントのポケットの中に在るんだ。今見せてやろう。ホラこの通りだ。

博士製造業

何を隠そう。吾輩の職業というのは医学博士を製造するのが専門だ。

笑つちやイカン。世の中に何が気楽だといったって医学博士を製造する位ワケのない仕事は無いんだ。一人前の掏摸すりやテキ屋を作るよりもヨツポド容易やさしい仕事なんだ。

先まず博士の卵を探し出すんだ。博士の卵なんて滅多に居ないようだが、気を付けてみると虱しらみの卵と同様、そこいらにイクラでも居るんだ。天下の青年こごとく、悉博士の卵ならざるなしと云つていい位なんだ。

その中でも理窟の強い奴の方が見込がある。何でも理窟の世の中だからね。「親は何なにゆ故えに吾々を生みたるや」ナンテいう余計な事を、一生懸命に考え詰めて、何でもカンでも理窟に合わせて終しまわないと鳥目だの、近眼ちかめだの、神経衰弱になる位、熱心な奴ならイヨイヨ上等だ。

その結果「親は面白半分に吾々を作りし者也」と解決を付けた奴は取敢えずアメリカあたりの文学博士になる奴で、「故に吾々は親に対して責任無し」と結論する奴はソビエツト直輸入の赤い法学博士の卵だろう。「1×1=1」なるが如しと論ずる奴は多分の独逸ドイツ

工学博士を含んだ卵で、「親は自分の老後を養わせむために吾々を生みし者也」と解釈する奴は仏蘭西フランス経済学博士の輸入卵と思えばいい。「その理由を発見する能わず」と叫ぶ奴はソツクリそのままイギリスの哲学博士で、従つて「結婚の生理的结果也」と感付いた奴が、最有力な日本の医学博士の雛ひよツ子になる訳だ。

そんな奴に「人間に喰付かれた犬は如何なる病気を感染するか」とか「猫の失恋ヒステリーの治療法如何いかん」とかいつたような問題と一緒に、数十匹の犬や猫を宛あてがっておくと大抵、半年、乃至なほ、三年ぐらいで解決して来る。「人間に喰付かれた犬は泥棒犬になる」とか「三味線に張つて猫ジャ猫ジャを弾く」とかいう論文を提出して博士になる。

ナア二、吾輩が論文を書いてやるんじゃないよ。その研究用の犬や猫を提供するのが吾輩の本職なんだ。イヤ、笑いごとじゃないよ。そこいらの大学や医学校なんか吾輩が居なくなつたら、忽たちまち一切の研究が停止するんだから大したもんだらう。

その犬や猫をどこから仕入れて来るかつて。アハハ。仕入れて来るといえば立派だが、実をいうと拾つて来るんだ。往來の廢物を拾い集めて、博士製造の材料に提供する商売だから非常な国益だらう。むろん鑑札も免状も、税金も何も要らない。商売往來にも何も無い。天下御免の国益事業だ。

もちろんこの商売を公認させるには相当の骨を折っている。この商売を初めてから間もなく、警察へ引っぱられて調べられた事がある。

「イクラ無鑑札の犬でも、持主の承諾を経ないで搔^かつ浚^{さら}いをするのは怪^けしからんじやないか」

とか何とか、お説教じみた事を吐^ぬかしおったから吾輩、一杯景気で、逆襲を喰わせてやった。

「利いた風な事を云うな。日本の警察はまだまだズツと大きな罪悪を見逃がしているんだぞ。彼^かの活動写真屋を見る。あんな映画を一本作るために、映画会社が何人の男女優を絞め殺したり、八ツ切^{ぎり}にしたりしているか知っているか。しかもその俳優^かたちは、みんな町から拾つて来た良家の子女ばかりじやないか。まして況^{いわ}んや彼^かの議会を見る。何百の議員の首を絞めたり、骨を抜いたり、缶詰にしたりして富国強兵の政策を決議させる。その議員^がというのは政党屋が、全国各地方から拾い上げて来た我利我利^{がりがりもうじや}者ばかりじやないか。吾輩が、町から拾つて来た動物のクズを殺して、博士を作るくらいが何だ」

とか何とか煙^{けむ}に巻いて帰つて来たが、妙なものでソレ以来スツカリ警察と心安くなつてしまつたもんだ。

見たまえ。この通りマントの袖の内側全部が袋になっている。これは吾輩が自身にボロ布ぎれを拾って来て縫付けたもので、このポケットは木綿の手織ており縞しまだ。こっちの大きいのは南洋更紗さらざの風呂敷で、こっちは縮ちりめん緬だから二枚重ねて在る。これが吾輩独特のルンペン犬の移動アパートなんだ。

このアパート・マントを一着に及んで、これもこの通り天井に空気抜ぬきの付いた流行色の山高帽かむを冠かむつて、片チンバのゴム長靴はを穿はいてブラリブラリと市中を横行していたら、いい加減時代後おくれの蘭法らんぽう医師いしぐらいには見えるだろう。ナニ、モット恐ろしい人間に見える。

フーム。テント天幕テントを質しつに置いたカリガリ博士。書齋しゆざいを持たないファウストか。アハハ。ナカナカ君は見立てが巧たくまいな。吾輩を魔法使いと見たところが感心だ。

いかにも吾輩が犬を拾う時の腕前は、たしかに魔法だね。到る処の往来にチヨコチヨコしている仔犬だの、前脚あしに顎あごを乗のっけて眠ねっている犬なぞを、通とっている人間が気付かない中うちにサツと引搦ひきんで、電光石火の如くこのマントの内側の袋アパートへ掴つかみ込むんだ。

知っているかも知れないが犬の首ツ玉を掴つかむには一つの秘伝ひでんがあるんだ。これは熟練ななつすると何でもないがね。犬の首ツ玉の耳みみの背後うしろよりも少し下したった処……八釜やかましく云いうと七個ななつ

在る頸骨けいこつの上から三つ目ぐらいの処をチヨイトつま抓むと、ドンナ猛犬でも頭がジンとなつて、この人にはトテモ敵かなわない。絶対服従といったような気分になるらしいね。眼を細くしてチヨイトと麻酔したような恰好かつこうで、氣持よさそうに手足をダラリと垂れる。心安いブルドッグか何かを相手にして実験してみたまえ。殊に医学の実験用に使う犬だったら、そんなに大きな犬でなくて良いのだから訳はないよ。そこを抓むと氣持がいいと見えて、啼なきもどうもしないからね。

ところでこのアパートへ這入はいると別に看板をかけている訳ではないが、長い間の老舗しにせの臭いがするらしく、犬の奴が安心すると見えてワンとも云わないでジツとしている。仔犬なんかだと、別れたお母さんの臭いでもするんだろう。クンクン啼出なきたす事もあるが決して出て行こうとしないから安心だ。電車に乗つても発覚しない事が実験済みなんだから平氣なもんだよ。

そんな訳で町から町をブラブラして手に入れた犬を大学や医学校へ持つて行くと、博士の卵が待ちかねていて、一匹八十錢から二円五十錢ぐらいで買つてくれる。平均すると衛生学部が一番高価くて、生理や解剖が一番安いようだ。これは衛生学部だと狂犬病の実験きりつに供して、高価たかい予防注射液を作る資本にするから、割に合うので、生理や解剖だと切

積たけった研究費で博士になろうと思つている筈連中が、単なる使い棄てに使うつもりだからだろう。勿論、学生上りだからといったつて馬鹿には出来ない。相当、足元を見る奴が居るので油断が成らないが、非道ひどい奴になると吾輩を乞食扱いにして値切る奴が居る。

「オイ、鬚野ひげの先生。三十銭に負けとき給え、ドウセ無料ただで拾つて来たんだろう」

そんな奴には、よく犬コロをタタキ附けてやったもんだ。横面よこつらを引つ搔かれたり、眼鏡を飛ばされたりして泣なき面つらになつて謝罪あやまる奴も居た。

「篋べらぼう棒めえ。無代ただで呉れてやるから無代で博士になれ。その代り開業してから診察料を取つたら承知しねえぞ」

天狗猿教授

……どうしてソナナ奇抜な商売を思い付いたかつて云うのか。ナアニ、吾輩が發明したんじゃない。向うから發明してくれたんだ。

前にも話した通り吾輩は、パトロンの有閑未亡人亜黎ありこ子さんの爆発昇天後、世の中ひもが紐ひもの切れた越えちゆうふんどし中し禪ぜんみたいにズツコケてしまつて何をするのもイヤになった。毎日毎日

どこを当てどもなく町中をブラブラして、料理屋のハキダメを覗きまわったり、河岸縁かしのべの蟹かにと喧嘩したり、子供の喧嘩を仲裁したり、溝とどろに落ちたトラックを抱え上げてやったりしているうちに或日の事、大学の構内へ迷い込んだ。吾輩これでも亜黎子未亡人のお蔭で、世界有数の大学者になっているんだから、学問の臭いを嗅かぐとなつかしい。どこかで学者らしい奴にめぐり会わないかなあ、会ったら一つ凹へこましてやりたいがなあ……なんかと考えながら来るともなく法医学部の裏手に来ると、紫陽花あじさいの鉢を置いた窓から吾輩を呼び止めた奴がある。

「オイ君君……君……ちよつと……」

見ると相当の老人だ。顔が天狗てんぐざる猿ざるみたいで、頭の毛がテリヤミみたいに銀色に光っている奴をマン中から房ふさふさ々と二つに別けている。太眉ふとまゆが真黒まじくろで髯ひげは無い。そいつが鼻眼鏡をかけて白い服を着て、紫陽花の横から半身を乗出したところは何となく妖怪じみている。処女見たいな眼を細くして金歯をキラキラ光らしているから一層、気味が悪い。一見して容易ならぬ学者だという事がわかる。

「……君……一つ頼みたい事があるんだが」

学者だけに常識が無いらしい。初対面の人間に物を頼むのに、窓越しに頼むという法は

無い。吾輩も腕を組んだまま、振返って返事してやった。

「何の御用ですか」

天狗猿がニツコリと笑った。

「君は実験用の犬屋だろう」

吾輩は面喰らった。そんな商売が在る事を、その時がその時まで知らなかったもんだから思わず自分の姿を見まわした。成る程、煙突の掃除棒みたいな頭に底の無いカンカン帽を冠かぶっている。右の袖の無い女の単ひとえもの物の上から、左の袖の無い男浴衣を重ねて、縄の帯を締めている。河岸の石垣の上から穿はいて来た赤い鼻緒ひよりげたの日和下駄ひよりげたを穿はいているが、これはどうやら身みなげ投女の遺留品らしい。成る程、実験用の犬屋というものはコンナ姿のものかなと思つたから黙つてうなずいた。天狗猿もうなずいてポケットを探りながら半分ばかり残っている朝日の袋とマッチを差出した。

「吸わんかね……君……」

「呉れるんですか」

「うん。君は好きだろう。歯が黒い」

吾輩は気味が悪くなった。天狗猿の奴、吾輩を吞込んでいるらしい。

「まあ御用を承つてからにしましょう」

「アハハ。恐ろしく固苦しいんだね君は……ほかでもないがね。実は今まで僕の処に出入りしていた実験用の犬屋君が死んじやったんだ。腸チブスか何かでね。おかげで実験が出来なくなつて困つて居るのは僕一人じゃないらしいんだ。本職の犬殺し君に頼んでもいいんだが、生かして持つて来るのが面倒臭いもんだから高価たかい事を吹っかけられて閉口して居るんだ。君一つ引受けてくれないか。往来から拾つて来るんだから訳はないよ。一匹一円平均には当るだろう。猫でもいいんだが……」

「つまり犬殺しの反対の犬生かし業ですね」

「まあ……そういつたようなもんだが立派な仕事だよ。往来の廃物を利用して新興日本の医学研究を助けるんだからね。君が遣つてくれないと困るのはこの大学ばかりじゃないんだ。向うの山の中に在る明治医学校でも実験用の動物を分けてくれ分けてくれつてウルサク頼んで来ているんだからね。大した国益事業だよ」

吾輩は天狗猿の口の巧いのに感心した。丸い卵も切りようじや四角、往来の犬拾いが新興日本の花形なんだから物も云いようだ。

「やつてみてもいいですが、資本が要りますなあ」

「フウン……資本なんか要らん筈だがなあ」

「要りますとも……犬に信用されるような身姿みなりを作らなくちゃ……」

「アハハ、成る程……どんな身姿かね」

「二重マントが一つあればいいです。それに山高帽と、靴と……」

「恰度ちやうどいい。ここに僕の古いのがある。コイツを遣ろう」

と云ううちに最早もう、古山高と古マントと古靴を次から次に窓から出してくれたので、流さ石すがの吾輩も少々煙けむに巻かれた。

「洋傘こうもりは要らんかね」

「モウ結構です。先生のお名前は何と仰おっしゃ言るのですか」

「僕かね。僕は鬼目おにめという者だ。この法医学部を受持つている貧乏学者だがね」

吾輩は思わず貫い立ての山高帽を脱いだ。鬼目博士の論文なら嘗かつて亜黎子未亡人の処で読んだ事がある。その頃まで、三十年前頃までは、微々として振わなかった日本の法医学界に、指紋あしあとと足痕あしあとの重要な研究を輸入した科学探偵の大家だ。

「学界のためだ。シツカリ奮闘してくれ給え。君を見込んで頼むんだ」

「しかし……しかし……」

「しかし何だい。まだ欲しいものがあるかい」

「イヤ、先生はドウして僕が、この仕事に適している事をお認めになつたんですか」

「アハハ、その事かい。それあ別に理由は無いよ。君の過去を知つてゐるからね」

「エツ、僕の過去を……」

「僕は度々君の軽業を見た事があるんだよ。君がドコまで不死身なのか見届けてやろうと思つてね。毎日毎日オペラグラスを持って見に行つたもんだよ。だから君があミイラの木乃伊親爺を殺したホントの経緯いきざつだつて知つてゐるんだよ。あの未亡人を爆発させた火薬と、バルチック艦隊を撃沈した火薬が、同じものだつてことも察してゐるんだよ。ハハハ」

吾輩は聞いているうちに全身が汗ビツシヨリになつた。コンナ頭のいい恐ろしい学者が人間世界に居ようとは夢にも思わなかつたので今一度シャツポを脱いで窓の前を退散した。人生意気に感ず。武士は己おのれを知る者のために死すだ。考えてみると吾輩というこの人間の廢物を拾い上げてくれた奴は、次から次に、吾輩のために非業ひげうの死を遂げて行くようだ。最初が木乃伊親爺ミイラ、その次が有閑夫人亜黎子、いずれも吾輩と似たり寄つたりの廢物揃いであつたが、今度はどうして廢物どころじゃなく、日本第一の法医学者、鬼目博士と来てゐるんだから間諜間諜まごまごしてゐるとこつちが位くら負けして終しまうかも知れない。むろんこつちで

も恩を仇あだで返すりょうげん了。簡かんなんか毛頭無いんだが……ともかくにも吾輩の博士製造業……
往來の犬生かし事業は、こうして天狗猿の鬼目博士から授さずかったものなんだ。

ウンコ色貴婦人

そうだよ。目下のところ、吾輩は犬が専門だよ。以前もとは猫もやっていたが、アイツは中々手数がかかるんだ。

猫という奴は芸者と同様ナカナカ一筋縄では行かない。ニャアニャアいつて御機嫌を取るようだが、元來は猛獸なんだからそのつもりでないといふと非道ひどい目に会う。その猛獸一流のハッキリした個人主義を伝統でんとうしていて、自分以外のもの一切を敵と心得ている奴が猫だ。物蔭から「フツ」というと間一髪まひげの同時に身構みかまえるという、講道館五段以上の達人だから容易な事では手に合あわない。もつとも蝮まむしを手掴てつかみにする商売人も居るんだから練習すると相当に掴めるんだが、持つて帰るのが面倒だ、中々マントの内ポケットにジツとしてなんかいないんだから袋の口を釦ぼたんで止めとかなくちゃならん。

だからコイツは釣るの一手だ。何でも構かまわないからコマギレを引っかけた釣針つりばねに糸を附

けた奴を、人通りの無い横露路か何かで、適当な猫の隠れ場所の在る近くに結び付けておくと、奴さん、散歩の序に通るかかかって引つかかる。チクリと来ると吐出すが又、喰う。そのうちに鉤が舌に引つかかるんだが、引つかかったら最後、決して啼かないから妙だ。

「ミイやミイや」

なんて抱主が探しに来てもジイツと塵箱の蔭なんか隠れてしまうからナカナカ見付からない。頃合いを見計らって、そいつを拾ってまわると一日に五匹や六匹は間違いない。釣針に附いた糸をマントのボタンに捲付けておけば神妙に黙ったまま藻掻いている。「まあまあ可愛相に……コンナ非道い事をして……ジツとしておいで、外して上げるから。イクラお肴を盗んだってアンマリじゃないか。死んだら化けて出ておやり。憎らしい……」

なんていうのには百の中一つも行当らない。

もう一つ猫をやめた理由は、ドウも犬と猫との間に需要、供給の不公平があるらしい。犬の余り物の方が實際上、猫よりも遥かに多いんだ。

俗に三味線太鼓といって三味線は猫の皮、太鼓は犬の皮ときまっているらしいが、猫の皮は日本国中、自惚と瘡毒氣の行渡る極み、津々浦々までペコンペコンとやっているが、

太鼓の方はそうは行かない。イクラ非常時だからといったってあっちへドンドンこつちへドンドンやっていたら日本中が「お月様イクツ」になってしまう。だからワンワンの廃りすた物の方がニヤアニヤアのルンペンよりも遙かに多い訳だ。

もつと尤もいくらワンワンだって、無鑑札の廃物ばかりを狙っている訳じゃない。時には必要に応じて有鑑札のパリパリを狙う事もある。コイツは極く内々の話だがトテモ珍妙な事件が在るんだ。ツイこの頃の事だ。

今云つた天狗猿博士の乾分こぶんで、法医学の副手をやっている男が、是非とも中位のセパードが一匹欲しい。軍用犬の毒物に対する嗅覚と、その毒物に対する解剖学上の反応を調べてみたいのだが、ナカナカ手に入らないので困っている。金は十円ぐらゐまで奮発するから一つやつてくれ。鬚野先生以外にお頼みする人が居ないのだから……と恐ろしく煽動おだてやがったから特別を以て引受けてやった。

そこでその副手から鋭利なゾリンゲン製の鋏はさみを一挺借りて、その日一日中と、あくる日の夕方までかかつて市中の屋敷町という屋敷町をホツキ歩いたが、誰でも知っている通りセパード級の犬になるとどこの家うちでもナカナカ外へ出さない。タマタマ出していてもゾツとする位大きな奴だったり、頑丈な男が鎖で引っぱっていたりして注文通りの奴に一度も

行当らない……これでは日当にならない。ほかの雑犬ざつばを漁あきつて数でコナシた方が割がいい。これ位で諦らめて鋏を返してしまおうか知らんと胸算用をしいしい来るともなく、市内でも一等繁華な四角よつかどの交叉点こうさてんへ来てて、ボンヤリ立っているうちに、居た居た。生後三箇月ぐらいの手頃のセパードで、お誂え向きに革の細い紐で引っぱられている。しかも引っぱっている奴は四十五六ぐらいに見える貴婦人だ。

吾輩は元来、貴婦人氣取の女が嫌いだね。都合よくエライ親父かエライ亭主に取当ったのを自慢にして、ほかの女とは身分が違うような面付かおつきをしている……その根性がイヤなんだ。貴婦人と普通の女の違いは、債券に当った奴と当らない奴だけの違いじゃないか。

しかもその身分違いをハッキリさせるために、平民が寄付けないようなドエライ扮装を凝こらしやがる。薄黒いドーナツ面づらへ蒟蒻こんやくの白和えしらあみみたいに高価たかいお白粉しろいをゴテゴテと塗りこくる。自分の鼻が慣れつこになればなるほど、強烈な香水を振りかけるから、何の事はない、塗り立てのコールターだ。目の見えない奴は新しいポストと間違えて避よけて行くだろう。気の強い奴は処女に見せかける了簡と見えて、頬ペタをベタベタと糞うんこ色いろに塗上げている。おまけに豚の尻けつみたいな唇を鮮血色いろどに彩いろどっているから、食後なんかにお眼にかかるとムカムカして来るんだ。特権階級を氣取るつもりらしく、ヤタラに銀狐の剥

製か何かを首に巻いているが、その銀狐の面付つらつきの方が、直ぐお隣の御面相よりもよっぽどシヤンなんだから滑稽じゃないか。のみならず、せめてブルドッグでも召連れていれば多少の参考になるところだが、選よりに選よって眉目清秀のセパードなんかを引っぱっているからイヨイヨ以て助からない。

冒険大泥棒

その繁華な交叉点で吾輩がぶつかったのは、ちようどその助からない種類の貴婦人だった。全体にムクムクと膨ふくれ返くって、大水で流れて来たか、花火から落ちて来たみたいな四十五六の処女らしい身装みなりの奴が、ゴーストツプの開くのを待っているらしく、航空郵便の横に突立つって、白ペンキ色の襟首と、毒々しいウンコ色の横顔を見せている。これじゃ何ともなくともチョット悪いたずら戯ざを試してみたくなる恰好じゃないか。

しかし吾輩は考えたよ。

ここは恐ろしく場所が悪い。ちよつとでも通行人に気付かれたら運の尽きだと思つたが……しかしだ。「天の与うるところのものを取らずんば、取らざるに勝まさる後悔あり」とね、

「機会は再び来らず」という鼠小僧の遺訓を思い出したものだから一つ思い切つて決行した。貴婦人が引っぱつてゐる革の紐のたるんだところを目がけて、例の鉄でチョン切る。トタンに例の手で犬をポケットに納めるといふ離れ業を試みた……。

……つもり……だったがあニ計らんやだ。天なる哉、命なる哉だ。あニが計らずに弟が計つたものと見えて、革の紐をチョン切つたトタンに向うのゴーストツプが青に變つた。トタンに待構えていた貴婦人が向うへ歩き出す。トタンに手の革紐が軽くなつたのに気が付いて振返る。トタンに吾輩が犬の首ツ玉を吊るしてポケットに半分納めかけている現場が見えた。トタンに失策しまつた……と思つた吾輩が、その貴婦人のヨークシヤ面づらを睨んでニタニタと笑つて見せた。トタンにその貴婦人が、鳥だか獣だか、わからない声をあげてフラフラと前へのめつた。トタンに横合いからすべつて来たドッジの箱自動車セダンが、その貴婦人の在りもしない鼻の頭を、奇蹟的に突飛ばして停車した。トタンに貴婦人の意識にも奇蹟のブレーキが掛かつたらしく両足を上にしてヒヤーツと顛覆てんぷくする。トタンに吾輩が投出したセパードが御主人のお尻の処を嗅ぎまわつて悲し気に吠え立てる。トタンに通りかかつた野次馬がワアーと取巻く。そこいら中がトタンだらけになつちやつて、何がどうして、どうなつたんだかテンヤワンヤわからない状態に陥つてしまった。

これを見た吾輩はホツとしたね。この調子なら吾輩が仕出かした事とは誰も気付くまい……と思つたから何喰わぬ顔で野次馬を押分けた。その伸びちやつてゐる貴婦人の頭の処へ近付いて大急ぎで脈を取つて見た。それから^{まぶた}瞼を開いて太陽の光線の流れ込まして見ると、茶色の眼玉を熱帯魚みたいにギョロギョロさしている。たしかに、まだ生きている事がわかつたので今一度ホツとしたね。

「ワア……テンカンだテンカンだ……」

「そうじゃねえ、行倒れだ」

「何だ何だ。乞食かい……」

「ウン。乞食が貴婦人を診察しているんだ」

「……ダ……大丈夫ですか」

とドジを踏んだ運転手が、吾輩の顔を覗き込んだ。青白い銀狐みたいな青年だ。

「何だ何だ。死んだんか。怪我^{けが}をしたんか」

と馳^{はせつ}付けて来た交通巡査が同時に訊いた。察するところ、運転手の方は生きてゐる方が好都合らしく、巡査の方はこれに反して、死んだ方が工合がいらしい口ぶりだ。面喰らつたセパードは、まだ貴婦人のお尻の処を嗅ぎまわつてドツチ附かずに吠えている。

「どうしたんだ。ヘタバツたのかい」

「ナアニ。鼻が千切れたんだよ。キツト……俺あ見てたんだが」

「ベリベリツと音がしたじゃねえか。助からねえよ。急所だから……トテモ……」

何かと云つているところを見ると野次馬の連中も巡査と同感らしい。人生貴婦人となる
勿^{なか}れだ。

しかし厳正なる医師の立場に居る吾輩は、遺憾ながら運転手君に味方しなければならぬ
い事をこの時、既に既に自覚していた。貴婦人は最早^{もはや}、呼吸^{いき}を吹返している。ただキマリ
が悪いために狸の真似をしている事実を、吾輩はチャンと診断していたのだから止むを得
ない。

吾輩はダカラ^{もったい}勿体らしく咳払いを一つした。

「……エヘン……これは大丈夫助かります。大急ぎで手当をすればね。脳貧血^{ヒルンアネミー}と、脳^ゲ

震^{ヒルンエルシユテルン}盪^ンが同時に来ているだけなんですから……」

「何かね。君は医師かね」

と新米らしい交通巡査が吾輩を見上げ見下した。吾輩は今一つ……エヘン……と大きな
咳払いをした。それから悠々と長鬚を扱^{しご}いて見せた。

「そうです。大学の基礎医学で仕事をしている者です。天狗猿……イヤ。鬼目教授に聞いて御覧になればわかるです。……そんな事よりも早くこの女の手当をした方がいいでしょう。今、処方を書いて上げますから……誰か紙と鉛筆を持っておらんかね」

「ハ。……コ……ここに……」

と云ううちにドツジの運転手が、わななく手で差出した手帳の一枚を破いた吾輩は、サラサラと鉛筆を走らせた。

「早くこの薬を買って来たまえ。間に合わないと大変な事になるぞ」

「……か……かしこまり……」………「………ました………と云わないうちに運転手はエンジンをかけたままの運転台に飛乗った。アツという間にフルスピードをかけて飛出した。

チャツカリ小僧

「……ウヌ……逃げたナ……」

と云ううちに交通巡查も、物蔭ものかげに隠しておいた自働自転車を引ずり出して飛乗った。爆音を蹴散けちらして箱自動車セダンの跡を追った。見る見るうちに街路まちの向うの……ズウツト向う

の方へ曲り曲つて見えなくなつてしまつた。

呆氣あつけに取られて見送つていた野次馬連は、そこでやつと吾に帰つたらしく、顔を見合わせてゲラゲラ笑い出した。吾輩も可笑おかしくなつたので、血を滴たらし始めている貴婦人の鼻の頭を、運転手が置いて行つた小さなノートブックの間から出て来た二三枚の名刺で押えてやりながらアハアハアハと笑い出した。

「奥さん奥さん。いい加減に起きて歩いたらどうです。いつまでもここに寝てたつて際限がありませんよ」

と片手で貴婦人の肩を揺り動かしてみた。

「無理だよソレア……先生。死んでんだもの……」

皆がドツと笑い出した。貴婦人の両眼から涙がニジミ流れ始めた。人生コレ以上の悲惨事は無い。自分の死骸に対して世間の同情が全く無い事を知つた美人の気持はドンナであろう。どうも弱つた事になつて来た。そのうちにどこかの茶目らしいクリクリ頭に詰襟服の小僧が、群集の背後うしろから一枚の紙片かみきれを拾つて来て、吾輩の眼の前に突出した。

「先生。これあ今の紙じゃないですか」

「ウン吾輩が書いてやつた処方だ。運転手が逃げがけに棄てて行つたものらしいな。交通

「巡査は流石さすがに眼が早い」

「だって先生。名刺の挟まったノートを落して行ったんじゃ何にもならないでしょう」
鳴りを鎮しずめていた群集が又笑い出した。

「ウーム。豪えらいぞ小僧。今に名探偵になれるぞ」

「……そ……そんなんじゃありません」

「そんなら済まんがお前、その薬を買って来てくれんか。そこに落ちているこの奥さんのバッグに銭ぜにが這入はいっているだろう」

「だって……だって。そんな事していいんですか」

「構こわないとも。早く買って来い。奥さんが死んじやうぞ」

と背後うしろの方から野次馬の一人が怒鳴った。しかし小僧はなおも躊躇ちゅうした。

「ちよつと待つて下さい。何と読むんですか。この最初の字は……」

「うん。それはトンブクと読むんだ」

「トンブク……ああわかった。頓服とんぷくか……ええと……メートル酒十銭……」

「馬鹿。メートル酒と読むんだ。早く行かんか」

「待つて下さい。薬屋で間違まちがうといけねえから、その次は？」

「ナカナカ重役の仕込みがいいな貴様は……チャツカリしている。それは**硼酸軟膏**と**万創膏**と**脱脂綿**だ。薬屋に持って行けばわかる。早く行け、この奥さんの鼻の頭に付けるんだ」

「オヤオヤア。いけねえいけねえ。これあ駄目ですよ先生……」

「何が駄目だ」

「チャアチャア。このバッグの中には銭なんか一文も無えや。若い男の写真ばつかりだ。ウワア……変な写真が在ライ」

と云いも終らぬうちに塵埃だらけになって転がっていた狸婦人が鞠のように飛上った。茶目小僧の手から銀色のバッグを引つたくとハンカチで鼻を押えたまま一目散に電車道を横切つて、向うの角のサワラ百貨店の中に走り込んで行った。アトから犬が主人の一大事とばかり一直線に宙を飛んで行ったが、その狸婦人の足の早かったこと……。

野次馬がドツと笑い崩れた。

「ナアンダイ。聞いてやがったのか」

「向うの店で又引つくり返りやしねえか」

「行って見て来いよ。小僧。引つくり返えつてたらモウ一度バッグを開けてやれよ。中味

をフン奪だくつて来るんだ。ナア小僧……」

「なあんでえ。買わねえ葉が利いチャツタイ」

ワアワアゲラゲラ腹を抱えている中を、吾輩は悠々と立去った。全く助かったつもりでね。

ところが助かっていなかった。女の一念は恐ろしいもんだ。それから間もなくの事だ……。

コンクリート
混凝土令嬢

「アラツ。鬚野ひげのさん……鬚野先生……センチ」

どこからか甲高い、少々媚なまめかしい声が聞こえて来た。吾輩はバツタリと立止まった。バツタリというのは月並な附け文句ではない。吾輩が立止るトタンに両脚を突込んでいる片チンバのゴム長靴が、実際にバツタリと音を立てたのだ。序ついでに水の沁み込んだ靴底に吸付いた吾輩の右足の裏が、ビチビチと音を立てたが、これは少々不潔だから略したに過ぎないのだ。

吾輩は空気抜の附いた流行色の古山高帽を冠^{かぶ}り直した。裸体^{はだか}一貫の上に着た古い二重マントのボタンをかけた。

通りがかりのルンペンを呼ぶのに最初「サン」附けにして、あとから一段上の先生なんかと二た^ふ通りに呼分けるなんて油断のならぬ奴だ。況んや^{いわ}それが若い、媚め^{なま}かしい声なるに於いてをや……といったような第六感がピインと来たから、特別に悠々と振返った。

それはこの町の郊外に近い、淋しい通りに在る立派なお屋敷であつた。主人はこの町の民友会の巨頭^{おおあたまかぶ}株^{かぶ}で、市議員のチャキチャキで、ツイ四五週間前のこと、目下百余万円を投じて建設中の、市会議事堂のコンクリートを嚙^{かじ}り過ぎた酬^{むく}いで、赤い煉瓦の法律病院に入院して、新聞と検事に背中をたたかれたたかれ財産と臟腑の清算、尻拭い中である。その奥さんは、その亭主の尻拭い紙である色々な重要書類を紛失したのを苦にして、発狂して死んでしまった……と云つたら誰でも「ああ。あの^{コンクリート}混凝土野郎か」と云うであろう。その混凝土^{コンクリート}氏^{やまき}こと、山木勘九郎氏邸の前を通ると、鬱^{うつ}蒼^{そう}たる櫛^{かじ}の木立の奥に、青空の光りを含んだ八手^{やっぺ}の葉が重なり合つて覗いている。その向うにゴチック式の毒々しい色硝子^{ガラス}を嵌^はめ込んだ和洋折衷の玄関が、贅沢にも真昼さなかから電燈を点^つけて覗いているも、う一つ向うに、コンクリートの堂々たる西洋館が聳^{そび}えているところを見ると、如何にも容

易ならぬ金持らしい。ちよつと忍び込んでみたくなる位である。多分、あの櫛の木の闇くまがりが御自慢なのであろうが、コンクリート混凝土を喰った証拠こんクリートに混凝土の家を建てるのはドウカと思う。……なぞと詰まらない反感を起しながら門の前を通り過ぎようとしているところへ、その鬱蒼たる櫛の木闇こくろがりの奥から聞こえたのが今の呼声だ。

コンナ立派な家の中から、あんな綺麗な声で呼ばれるおぼえは無い。間違いではなかったかなと思つているところへ、門の中から花のような綺麗な、お嬢さんの姿があらわれた。年の頃十八九の水々しい断髪令嬢だ。黒っぽい小浜縮緬こはまぢりめんの振袖をキリキリと着込んで、金と銀の色紙と短冊の模様を刺繍した緋羅紗ひらしやの帯を乳の上からボンノクボの処へコックリと背負い上げて、切り立てのフェルト草履の爪先を七三に揃えている恰好は尋常の好みでない。眼鼻立めはなだちが又ステキなもので、汽船会社か、ビール会社のポスター描かきが見したら二三遍ぐらいトンボ返りを打つだろう。

そいつがニツコリ笑うには笑つたが、よく見ると顔を真赤にして眼を潤うるませている。まさか俺に惚れたんじやあるまいが……と思わず自分の顔を撫でまわしてみたくらい、思ひがけない美しい少女であつた。

「何だ……吾輩に用があるのか」

「……エ……あの。ちょっとお願いしたい事が御座いますの」

と云ううちに、しなやかな身体からだをくねくねという恰好にくねらせた。しきりに顔を真赤にして自分の指をオモチヤにしている。

「……ハハア。犬が欲しいんか」

まさかと思って冷やかし半分に、そう云つてみたのであったが、案外にもお合羽かっぱさんが、如何にも簡単にうなずいた。

「ええ……そうなんですの」

「ほオ——オ。お前が動物実験をやるチウのか」

「……アラ……そうじゃないんですの……」

「ふむ。どんな犬が欲しい」

「それが……あの。たった一匹欲しい犬があるんですの」

「ふむ。どんな種類の……」

「フオックス・テリヤなんですの。世界中に一匹しか居ない」

「ウワア。むずかしい注文じゃないか」

「ええ。ですからお願いするんですの」

「ふうん。どういうわけで、そんなむずかしい仕事を吾輩に……」

「それにはあの……ちよつとコミ入った事情がありますの。ちよつとコチラへお這入りはいになつて……」

と云ううちにイヨイヨ真赤になつた。今度は平仮名の「く」の字から「し」の字に変わった。打棄うちちやつておくと伊呂波いろは四十八文字を、みんな書きそうな形勢になつて来たのには、持つて生れたブツキラ棒の吾輩も負けちやつたね。今に「へ」の字だの、「ゑ」の字だのを道傍みちばたで書かれちや大變だと思つたから、悠々と帽子を取つて一つ點頭うなずいてみせると、お合羽さんは振袖を翻えして門の内へ走り込んだ。お尻の上の帯をゆすりゆすり玄關の扉ドアを開いて、新派悲劇みたいな姿態ポーズを作つて案内したから吾輩も堂々と玄關のマットの上に片かたびつこ跛この護謨靴ゴムを脱いで、古山高帽を帽子掛にかけた。お合羽さんが自分の草履と、吾輩の靴を大急ぎで下駄箱に仕舞うのを尻目に見ながら堂々と応接間に這入つた。

「失礼じゃがマントは脱がんど。下は裸一貫じゃから」

「ええ。どうぞ……」

応接間の構造は流石さすがに当市でも一流どころだけあって実に見事なものであった。天井裏から下った銀と硝子ガラスの森林みたような花電燈。それから黒虎斑ぶちの這入った石造の大燧だんろ。壁理髪屋式の大鏡。それに向い合った英国風の風景画。錦手にしきでおおどんぶり大井と能面を並べた壁飾ざり。その下のグラント・ピアノ。刺繍の盛上った机掛。黄金の煙草容器。銀づくめの湯の音をジャンジャン立てているサモワルに到るまで、よくもコンナに余計な品物ばかり拾い集めたものである。乞食の物置小屋じゃあるまいし……とすっかり軽蔑してしまつたが……もつとも余計な品物を持つている点に於ては吾輩も負けないつもりだ。冠っている山高から、ボロ二重マント、穿いている長靴は勿論の事、その中に包まれている吾輩、鬚野房吉博士の剥身むきみに到るまで一切合財が天下の廢物ならざるはなし。コンナ豪華な応接間の緞子どんすと真綿まわたで固めた安樂椅子の中に坐らせるのは勿体ないみたいなもんだが、しかし、その贅沢品の豪華版の中から生まれ出たような断髪おつしやの振袖令嬢が、その廢物づくめのルンペンおやじに、大切な用があると仰言おつしやるんだから世の中は不思議なもんだ。一つ御免蒙おみこしつて御神輿おしろを卸してみよう。そうして銀のケースの中から葉ハヴァナ巻を一本頂戴してみる事にしてみよう。

断髪令嬢が素早く卓上のライタを取上げて器用に火をつけてくれた。その物腰をみるとチヨット珈琲店の女給さんみたいな気がして、手が握りたくなつたが止した。

それから断髪令嬢は卓上のサモワルから馴れた手附で珈琲を入れて、吾輩にすすめてくれたが、その容器を見ると、ここが断然カフエーでない事を覚らせられた。そこいらにザラにある珈琲茶碗じゃない。舶来最極上の骨灰焼だ。底を覗いてみると孔雀型の刻印があるからには勿体なくもイギリスの古渡りじゃないか。一つ取落しても安月給取の身代ぐらひはワケなく潰れるシロモノだ。吾輩はルンペンではあるが、有閑未亡人の侍従をやつていたお蔭でソレ位のことにはわかる。亜米利加の名探偵フィロ・ヴァンスみたいな半可通とはシキが違ふんだ。

「……わたくし……父が御承知の通りの身の上で御座いまして……わたくし迄も世間から見棄てられておりました……お継りして御相談相手になつて下さるお方が一人も御座いませんの」

「フムフム……尤もじゃ」

「みんな世間の誤解だから、心配する事はないと、父は申しておりますけど……」

吾輩は鷹揚にうなずいて見せた。誤解にも色々ある。とんでもない売国奴が、無二の

忠臣と誤解されている事もあれば、純忠、純誠の士が非国民と間違えられる事もある。警察に引っぱられたカフエーの女給が、華族の令嬢に見られる事もあれば、いい加減な派出婦が万引したお蔭で、貴婦人と間違えられる事もある世の中だ。吾輩なんかは乞食以下の搔攫かっせらいルンペンと誤解されている世界的偉人だ……と云ってやりたかったが、折角、花のような姿をして葉巻ハヴァナや珈琲を御馳走してくれるものを泣かしても仕様がな思つて黙つていた。

「世間ではナカナカそう思つてくれないので御座いますの」

吾輩は今一つうなずいた。そう云う令嬢の眼付を見ると、どうやら父親の無罪を確信しているらしい態度よゆうすである。吾輩はグツと一つ唾液つばを嚙のみ込んだ。

「いったいお前の父親は、ほんとうに市会議事堂のコンクリートを嚙かじつたんか」

「いいえ。断然そんな事、御座いません。この家うちを建てた請負師の人が、偶然にかどうか存じませんが、市会議事堂を建てた人と同じ人だったもんですから、そんな誤解が起つたんです。ですから妾わたし、口惜くやしくつて……」

「成る程。そんならお前の父親が、この家の建築費用をチャント請負師に払うた証拠があるんかね」

「ええ。御座いましたの。そのほかこの応接間の品物なんかを買い集めた支払いの受取証などを、みんな母が身に着けて持っていたので御座いますが、それがどこかで盗まれてしまいました、その受取証や何かがみんな反対党の人達の手に渡ったらしいんです。ですから反対党の人達は大喜びで、そんな受取証を握り潰しておいて、父がそんなものを賄賂に貰ったように検事局に投書したらしゅう御座いますの。ですから検事局でも、その受取証を出せ出せって責められたそうですけど、父はその事に就いて一言も返事をしなかったもんですから、とうとう罪に落ちてしまいました」

「成る程、わかった。墮落した政党屋の遣りそうな事だ」

「父は、それですから、母にその証文を入れたバッグを出せ出せって申しますけども、どうしても母が出さなかつたので御座います」

「成る程。それは又おかしいな」

「ええ。でもおしまいには、とうとう母が白状致しましたわ。亡くなります二三日前の晩に、すこし気が落ち附きますと、それまで肌を離さずに持っていたバッグを父に渡ししました。けれども中味は空っぽで御座いました。その時から一週間ばかり前にどこかで自動車に突飛ばされて倒れた拍子に、そのバッグの中味を誰かに見られて奪られてしまったらし

いんですって……その人が反対党の手先か何かだったに違いないって母は申ししておりますが……ほんとに申し訳ない、口惜しい口惜しいって申ししておりますが……」

そう云つて吾輩を見上げた令嬢の眼に一点の露が光った。ナカナカ親孝行な娘だ。今度は抱上げて頭を撫でてやりたくなつた。

「そこでアンタはそのお父さんに対する世間の誤解を晴らそうと思つてゐるわけじゃね」「そうなんですの……駄目でしょうかしら……」

なかなか大胆な娘らしい。決心の色を眉宇びう みなぎに漲みなぎらしている。

犬のダニ

「さあ。ちよつとむずかしいなあ。世間の誤解という奴は犬のダニみたいなものじゃから……」

「まあ……犬のダニ……」

「そうじゃ。犬のダニみたいにな、勝手に無精生殖をしてグングン拡がって行くもんじゃからね。皮膚の下に喰込んで行くのじゃから一々針で掘った位じゃ間に合わんよ。ウツカリ

手を出すとこつちの手にダニがたかつて来る」

「まったくですわねえ」

「ジャガ芋の茹^ゆで汁で洗うと一ペンに落ちるもんじゃが」

「まあ。ジャガ芋をどう致しますの」

「アハハ。それは犬のダニの話じゃ。鉄筋コンクリートなんぞに喰い込んだダニなんちいうものはナカナカ頑強で落ちるもんじゃやない。七十五日ぐらいジツと辛抱しているとダニの方がクタビレて落ちてしまう事もあるが……」

「それがその七十五日なんか待ち切れないので御座いますの。その中^{うち}でも或るタツタ一人の方の誤解だけは是非とも解いてしまいませんと、わたくしの立場が無くなるんですの。……でも……それがタツタ一匹の犬から起つた事なのですから……スツ……スツ……」

令嬢の眼からポロリポロリと光る水玉が^{すべ}り落ち初めた。

どうも考えてみると変つた娘があればあるものだ。通りがかりのルンペン親^{おやじ}爺を応接間に引っぱり込んで最極上の葉^{ハヴァナ}巻と珈^{コーヒー}琲を御馳走して、生命^{いのち}よりも大切な涙をポロポロ落して見せるなんて、だいぶ常識^{はじ}を外れている。ことによるとこの少女はキチガイの一種である早発性痴呆かも知れないと思つた。

「ハハア。面白いワケじやな……一匹の犬に關係している。タツタ一人の誤解が……」

「そうなんですの……そのタツタ一人の方に誤解される位なら妾死んだ方がいいわ……スツ……スツ……」

「ちよつと待つてくれい。もうすこし落付いてユツクリ事情を話してみなさい」

お惚気豪華版

それから断髮令嬢がシャクリ上げシャクリ上げ話すところを聞いているうちに、やつと事情が判明つて来た。この断髮令嬢は本名を山木テル子さんという山木氏の一人娘で、エース女学校を去年卒業したばかりの才媛である。二年前に前外務大臣唾川伯爵の令息で、唾川歌夫という外務省情報部勤務の青年と婚約が出来ているのが、父親山木混凝土氏の疑獄事件で、そのままになっているという。

ところで、その唾川歌夫という青年外交官は、嘗てその婚約時代に和蘭、独逸、瑞西を遊学してまわった事があるが、その帰朝土産に仏蘭西は巴里の犬の展覧会から、何万法か出して買って来た世界第一、無類飛切というフォックス・テリヤのお手本みたような

仔犬を一匹持つて来て令嬢に与えた。

「式を挙げるまで、これを僕と思つて可愛がつて下さい」

という婚約者のお手本みたいな甘つたるい文句付きであつたが、その犬の特徴というのは、ピアノを弾き初めると妙に眼を白くして天井を見てアクビみたいな声を出して、アウーアウーと合唱する。そのほかABCのカード拾いだの、十以下の計算の答えをカードで出したりするので、令嬢はそれこそ有頂天になつて、名前をUTAと名付けて、手の中の玉みたいに可愛がつて夜は一緒に抱いて寝る。眼が醒めると、

「サア。ウーちゃん御飯をお上り」

と頭を撫でてやる。お客様が来ると直ぐに連れて来て芸当をやらせる。お客様が感心すると抱き寄せて頬ずりをしてやる。

「ねえ、随分伶俐りしこうでしょ。これ唾川小伯爵から頂いたのですよ。ねえねえウーちゃん。アラアラ眼脂めやにが出ているわよ」

なんかと云つて嘗なめてやらんばかりにして見せるので大抵のお客が驚いて帰つてしまう。夜となく昼となく甘つたるい言葉ばかりかけるので実の両親までもが、朝から晩までエヘンエヘンと云つていたという。

ところが、その父親に対する妙な風評が、次第に高まって来て、門の表札が引つpegがされたり、二階の硝子窓ガラスから石が飛込んで来たりし始めると間もなく、突然にそのUTA君が行方を晦くらました。むろん逃げたものだから殺されたものだから見当が附かない。門の外に出さないのだからといって鑑札を受けていなかったのが、運の尽きであったのかも知れない。テル子さんはキチガイみたいになった。むろん警察に頼んだ。私立探偵も雇った。自分でも男装して父親のパスカードのオープンを運転しながら、市中を駈けまわって探したものであるが、そのうちに世間の父親に対する憎しみがだんだん高まって来ると、とうとうそのパスカードにまで石を投げる奴が出て来た。しまいには壮士みたいな奴が五六人、大手を拡げて行手に立塞たちふさがったりするようになったので、流石さすがの断髪、男装令嬢も門外へ一步も出られなくなってしまうた。おまけに「非国民の断髪令嬢、大威張りでパスカードを乗廻す」という新聞記事で止刺刃とどめを刺されてしまった。

ところが間もなく更に、それ以上の打撃がテル子嬢の上に落ちかかった。

その頃既に父親の山木コンクリート氏は、世間の風評に対して極度の神経過敏症に陥っていたらしい。そのUTAが居なくなつたのは婚約者の唾川小伯爵がコッソリ盗み出したものに違いないと云い出した。俺みたいな奴の娘を名門の息子が貰う訳に行かないという

ので、父親の唾川前外相の指令か何かを受けた小伯爵が、人を頼んでか、又は自分自身で盗み出したものだ。今の華族なんて奴は妙に家柄や何かを振まわすが、その振まわす根性といったら実に軽薄なものなんだ。よしんば親は泥棒にしても子供同士は清浄無垢なものなんだ。沉んや俺の心境は明鏡止水、明月天に在り、水甕みずがめに在りだ。そんな軽薄な奴の息子にかけ換えのないお前を遣る訳に行かん。

あの医学士の羽振菊蔵はぶりきくぞうを見よ。彼奴あいつの親爺おやじの羽振菊佐衛門きくざえもんは貴族院議員のバリバリで、日支銀行の頭取という財界の大立物なんだが、そんな名門づらを一度もして見せた事がないばかりでない。俺に対する世間の疑惑が高まれば高まるほど熱心に俺の世話をしているだろう。毎日のように俺に秘密の電話をかけて俺を慰めていたではないか。その倅せがれの菊蔵でも同じ事。親の光りで暇潰しの外交官なんかやっている青二才とは育ちが違う。俺の悪評が高くなったこの頃になって平気でお前に婚約を申込んで来るところを見ると相当の苦勞人だ。あの男は目下大学で博士号を取る準備をしているそうだから。近いうちに博士になるだろう。博士になったら、お前の婿むことして恥かしくないのみならず、彼の精神が実に見上げたものだ。

第一唾川歌夫という奴は、外交官の癖に、親譲りの無口でブツキラボーで、刑事みたい

な凄^ひい眼^{まなこ}付き^{つき}をしているから、到底^{とうてい}外交官^{わいごうくわん}なんかに向^{むか}かない事^{こと}が、わかり切^きっている。これに反^さして羽振^{はねふり}菊藏^{きくざう}の方は弁舌^{べんぜつ}が爽^{さわ}かで、男^{おとこ}ぶりがよくて世間^{よこしま}の常識^{じょうしき}に富^とんでいるから、俺^{おれ}みたいな年寄^{としよ}と話^わしてもチツトモ退屈^{たいくつ}させないから感心^{かんしん}してしまう。だからお前^{まへ}も、いい加減^{かげん}に諦^{あきら}めて、羽振^{はねふり}の方に婚約^{こんやく}を切りかえろ、俺^{おれ}は一生^{いっしょう}懸命^{けんめい}で、お前^{まへ}のためばかり思^{おも}っているんだぞ……とか何とかいったような訳^{わけ}で、混凝^{こんけい}土^ど氏^しは或^{ある}る夕方^{ゆふがた}のこと、涙^{なみだ}を流^{なが}さむばかりにしてテル子嬢^{てるとしぢやう}の手^てを握^{にぎ}っているうちに、突然^{とつぜん}に検事局^{けんじきよ}に引^ひっぱられて、そのま^ま未決^{みけつ}へ放^{はな}り込^こまれてしまった。そのアトは父^{ちち}の気^きに入^いりの津金^{つがね}勝平^{かつへい}という執事^{しやくじ}みたいな禿頭^{くとう}の老人^{らうじん}と、親^{おや}よりも誰^{たれ}よりも八釜^{やかま}しい古参^{こさん}の家政婦^{かせいふ}で、八木^{やぎ}節世^{せつよ}という中婆^{ちゆうば}さんが、家^{うち}中の事^{こと}を切^きまわしているの、テル子嬢^{てるとしぢやう}は全然^{ぜんぜん}手^ても足^{あし}も出^でなくなっているという。

「唾川^{つばがわ}歌夫^{かお}さんは、それつきりお手紙^{おてがみ}を一本^{いっぽん}も下^{くだ}さらず、お電話^{でんわ}もおかけになりません。おかけにな^なっているかも知^しれませんが、電話^{でんわ}はイツモ家政婦^{かせいふ}の八木^{やぎ}さんか、津金^{つがね}爺^{ぢや}さんが聞いてしま^まつて、私^{わたし}には知^しらせませんし、お手紙^{おてがみ}だつて私^{わたし}が見^みる前に二人^{ふたり}して隠^{かく}しているらしい様子^{ようす}ですから……あたし……情^{なさけ}なくて……悲^{かな}しくて……スツ……スツ……」

吾輩^{われら}はそういう令嬢^{れいぢやう}の泣声^{なみだごゑ}を聞きながら茫然^{まぜん}として相手^{あいて}のお合羽頭^{あひば}を眺^{なが}めていた。

「フーン。で、その犬^{いぬ}がアンタの手^てに帰^{かえ}つたらアンタはどうするつもりかね。参考^{さんこう}のため

に聞いておきたいのじやが」

「だって、そうじや御座いません？ その犬が居ないと歌夫さんに、直ぐ来て下さいってお手紙が上げられないじや御座いませんか。いつでも速達を上げると直ぐに飛んで来て下さったんですからね。そうしてお出でになると直ぐに犬の事をお尋ねになるんですからね」

ルンペン道

「イヤ。わかったわかった。よくわかった。なかなか困難な注文のようじやが、やってみるかな一ツ……」

「あら……どうぞお願いしますわ」

テル子嬢が立上った。振袖を床の上に引ひきずつてお辞儀をした。吾輩もやおら立上った。「……しかし……もう一つお尋ねしておきたいことがあるがな」

「ハイ。何なりと……」

「そのアンタの母さんが自動車でお怪我けがをしなされた時の模様が、聞いておきたいのじやが」

「それが、よくわからないので御座います。母はただ口惜しい口惜しいと申しましてキチガイのように泣いてばかりおりまして……母は元来、非道いひどヒステリーで御座いまして、お医者様から外出を停められていたので御座いますが、ちょうど一月ばかり前のこと、あんまり屋内うちにばかり引つ込んでいてはいけなからと申しまして、セパードを連れて散歩に出かけますと間もなく、顔のマン中へ脱脂綿と油紙を山のように貼り付けて帰って参りましたのでビックリ致しました。何でもゴーストツプが開あいたので、犬を引いたまま横断歩道に出ようとすると、横合いから待ち構えていたらしい箱自動車が出て来て妾わたしを突飛ばした。その自動車の中から髯だらけの怖い顔をした紳士が降りて来て、気味の悪い顔でニタニタ笑いながら、私を診察しいしい、まわりを取巻いている見物人をワイワイ笑わせていた。その隙すきに、その紳士が、妾のハンド・バッグの中味を検あめて大切な書類さくらを攫さらって行ったものらしい。あの髯だらけのルンペンみたいな紳士が、きつと反対党の廻し者か何かだったに違いない。口惜しい口惜しいと云つて寢床の中で身もだえをしておりますうちに、非道い発作が起りまして、『妾はコンナ非道い侮辱を受けた事はない。仇かたきを取つて来るから』と云つて駈け出しそうになりますので皆みんなして押え付けようとしたが、どうしても静まりません。却かえつて非道くなつてしまつて、弓のようにそり反かえりますので、そのまま神

田の脳病院に入れて、寝台へ革のバンドで縛付けておきますと、その革のバンドを抜けようとして藻搔もがいた揚句あげく、どこかへ内出血を起して、その自家中毒とかで突然に……亡くなりまして……」

「成る程。どうもエライ騒ぎじゃったな。不幸ばかり重なって……」

「……ですから一層のこと歌夫さんがお懐かしくて仕様が御座いませぬの。コンナ時にこそ居て下さると、どんなにか力になるでしょうと思ひながら、それも出来ませぬし」

「イヤ。わかつたわかつた。よくわかつた。とにかく吾輩が引受けた。直ぐに今から活動を開始するじゃ。それではこれで帰ろう……いや構わんでくれ。左様さようなら……」

吾輩は一人で喋舌しゃべりながら慌てて帽子を冠かぶつて、長靴を穿はいて玄関を飛出した。往來に出で真青な空を仰ぐとホツとした。「アハハハ……」と思わず一人で高笑いした。冗談じゃない、テル子嬢の母親を殺し、父親を未決監にブチ込んだ人間は誰でもない、この吾輩という事になつてゐるらしい。直接に殺さなくとも責任は十分こつちにあるらしい。母親の云う事はテナワンヤのゴチャゴチャだからであるが、それでも吾輩の笑い顔だけはハッキリと記憶に残して死んでゐるらしいのだから頗るすこぶ気味が悪い。しかも女というものには、思い違いでも何でも構わない、一度そんな風に思い込んでしまうと、アトでいくら間

違っていることが判明^{わか}つても決して素直に承認する動物でない。女に思い込まれたのと、暴力団に付け狙われたのと、新聞に書かれたのと、スッポンに喰い付かれたのとは、如何なる場合でも運の尽きである。ありもしない事を勝手に口惜しがって死んだ場合でも、遠慮なく閻魔大王^{えんま}から幽霊の鑑札を受けて娑婆^{しゃば}に引返して来る位の決心を、女というものはフンダンに持っているのだから厄介だ。

のみならず何を隠そう、一ヶ月ばかり前にテル子嬢の大事なフォックス・テリヤを盗んで大学の博士の卵に売付^{うりつ}けたのは、誰であろう、この吾輩なのだ。家人の隙^{すき}を窺^{うかが}つたものであろう。チヨコチヨコと門の中から出て来て吾輩に向つて尻尾^{しっぽ}を振っている可愛らしいテリアに鑑札のないのを見て……この野郎、これくらい立派な家で鑑札を受けていないナンテ手はない、怪^けしからん野郎だ、引^ひつ攫^{さら}つてやれ……といったような気持でポケットに入れたのが吾輩の運の尽きであった。そのテリアたった一匹のために、お人形さんみたいな快活、明敏な令嬢が、破鏡の悲劇に陥ろうとしている。冗談じゃない。この責任が負わずにおられるもんか。

他人にわかりさえしなければ、どんな事をしてもいいというのが現代の上流社会の紳士道らしいが、吾々の所謂^{いわゆる}ルンペン道ではそうは行かん。五千円のダイヤでも無代^{ただ}では貰

わない。チャンと二銭払うのが屑屋の仁義になつてゐるじゃないか。

ウー
T A ヤアイ

世の中に行きがかりぐらい恐ろしいものはない……と吾輩は賑やかな電車通りに出て考えた。井伊の掃部様かもんは桜田門なんか通らなかつたら首無し大名なんかにならないで済んだであろうし、キリストやクレオパトラだつて今の世に生まれていたら 柊ハリウツド 林あたりのステージで抱合つて、監督をハラハラさせているかも知れない。俺だつて十四の年に女郎買に行つたのが振り出しで、いつの間にかコンナ 犬いぬざらい 攫いぬざらいのルンペンに……まあそんな事はドウでもいい。とにかく偶然ぐらい恐ろしいものは世の中にない。

ところで問題は眼の前の仕事だ。……出来るだけ美味い酒うまが飲めるような結論の方向へひっぱって行きたいものだが……差当つて先ず、何といつても問題のフォックス・テリヤウー
T A を探し出すのが目下の急務だろう。

ところで面白い事に吾輩はそのテリアウー
T A を売付けた相手の顔をチャンと記憶してゐるんだ。誰でもない、大学の耳鼻科の教室で研究している羽振菊蔵という医学士だ。今の

令嬢の話に出て来た通りの、いやにノツペリした気障な野郎だが、そいつの手にUTAが渡っているんだから冗いようだが偶然は恐ろしい。むろん羽振医学士は、そんな事とは夢にも知らない筈だし……イヤ、知っているかも知れないが、知っておれば尚更のこと、もうトツクの昔に実験にかけて殺してしまっているかも知れない。

吾輩は思わず急ぎ足になった。タクシー代は勿論、電車賃もない、昨夜飲んでしまったんだから……。

喜劇？ 悲劇？

実にいい天気だった。

いい天気だと往來を歩いている犬が多いもんだ。そいつを五六匹も攫って大学へ持つて行けば八両や十両の仕事には直ぐになる。行きつけの居酒屋「樽万」で銘酒「邯鄲」の生一本がキューと行ける筈なのに、要らざる処を通りかかって要らざる用事を引受けた御蔭で、千里一飛び、虎小走り一直線に大学へ行かねばならぬ。

断髪令嬢が、婚約中の愛人から貰った小犬を、そんな事とは知らない吾輩が攫って大学

校の博士の卵に売飛ばしたバツカリに、その断髪令嬢に対して重大な責任が出来てしまった。その小犬を取返して、断髪令嬢の破れかけたハートを修繕しなければならぬ責任を、いやおう否応なしに負わされてしまった。しかもその大切な小犬を実験用に買った奴が、その令嬢の愛人のこいがたき恋仇と来ているんだから話がヤヤコシイ。首尾よく犬が取返せるか、返せないか。この恋が成立するかしらないかという重大な責任が、千番に一番の兼ね合いで、吾輩の双肩にかかつて来た訳だ。

棒も歩けば犬に当るとはこの事だ。

考えてみると馬鹿馬鹿しい話だ。そんな責任をイケしやあしやあ酒唾酒唾と吾輩に負わした彼かの断髪令嬢は二三時間前まで、全く見ず識らずの赤の他人だったのだ。ドコの馬の骨だか牛の骨だか、訳のわからない同士だったのだ。人間、返す返すも行きがかりぐらい恐ろしいものは無い。

探偵小説では偶然の出来事を書く面白くないというのがこれは恋愛物語なんだから構わないだろう。しかも喜劇になるか、悲劇になるかは一に吾輩の手腕一つにかかっているんだから、何の事はない、実物応用の実際小説だ。世界歴史と同様今にドンナ事が始まるかわからない。舞台監督兼主演の吾輩からして一寸先は真まつくらやみ暗闇だ。

先ず断髪令嬢山木テル子の愛人、唾川歌夫の恋敵、羽振キク蔵君にブツカル訳だが、サテ、どんな機嫌様きげんさまにぶら下るか……。

半死の小犬

サア来た。大学医学部の実験動物飼育室に来た。イヤ、どうも暑い何のつて……二重マントの袖で汗を拭い拭いしてみたが明るい外界からイキナリ、暗い飼育室に来たもんだから鼻ふくろみたいにも見えない。何ともいえない劇毒薬の蒸発するような動物臭はらわたが腸はらわたのドン底まで沁しみ込んで行く。世界の終りかと思えるようなエタイのわからない悲鳴が、あとからあとから耳の穴に渦巻き込む。勿体なくも市内第一流の桃色ローマンズの糸きの切端きれはしがコンナ処ところに落込んでいようなんて誰が想像し得よう。先まず一息入れて落付いてみる事だ。

居る居る。猫だの犬だのモルモットだのがウジャウジャ居る。雛ひよ子こを育てるような金網あみの籠かごに犬は犬、猫は猫と二三匹か四五匹すつ宛あつ入れた奴やつがズーツと奥の方まで並んでいる。鶏にわとりも居るし小羊も居る。奥の方から羽は二重ふたえを引裂くような声が聞こえる処を見ると、猿を飼っている贅沢な奴やつが居るらしい。まさか青二才の博士の卵たまごが、猿さるの辜丸きんたまを使つて若返

り法を研究しているのじやあるまい。

そんな動物連中の排泄物や、体臭や、猛烈に腐敗した食餌の落零れの発酵瓦斯で、気が遠くなるほど臭い上に、ギヤアギヤアワンワンニヤーニヤーガンガン八釜しい事夥しい。その中でも犬の鳴声が圧倒的に大多数なのは吾輩の努力が与つて力がある訳で、心強いことこの上なしだ。その金網籠の一つ一つに、それぞれ所有主の木札が附いている奴へ、番人が、それぞれに餌を遣つている。この番人が犬や猫へ遣る御馳走をチョイチョイ掴んでいる事実を知っているのは吾輩だけかも知れないが、しかし又、こいつが居ないと、博士の卵連中が、研究室とかけ持ちで動物の世話をしなくちやならないのだから文句は云えない。吾輩みたいに無代価で攫つて来たシロモノを売りつける癖の附いた人間から見れば、この金網の番人などは、よつほど尊敬していい訳だ。だから吾輩はいつでも出会うたんびに山高帽をチョツと傾けて敬意を表する事にしている。上には上があると思つてね。

ところでその金網籠に附けた木札を覗きまわつてみると在つた在つた。ハブリと片仮名で書いた木札を附けた犬の籠が片隅に十ばかり固まつている。どうも恐ろしく犬ばかり集めたもんだと思つたが、よく見るとドレモコレモ見覚えのある犬ばかりだ。果然、羽振医学士閣下は吾輩の上華客だつた事を思い出した。ブルテリア、狎、セッター、エアデル、

柴犬など。飼犬の豪華版みたいだが心配する事はない。どれもこれも純粹種なんか一匹も居ないのだからヤヤコシイ。いい加減というよりも寧ろむしミジメな位の混合種ばかりが、尻尾振り合うも他生の縁という訳でギャンギャンキャンキャン吠え合っていたものだが、そいつが吾輩の顔を見ると一斉に吠えるのを止めて、尻尾を振り振り金網に立ちかかって来た。

吾輩は胸が一パイになった。タツタ二時間、三時間のおなじみでもチャント記憶しているから感心なものだ。勿論、吾輩の顔や風態を見覚えていた訳ではなからう。アレキサンデル 亜歴山大王は身体に薔薇ばらの臭いがしたという位で、吾輩みたいな偉人の体臭は、犬にとっても忘れられないものがあると見える。

その中にタツタ一匹、歓迎の意を表さない奴が居る。隅っ子の特別の金網に入れられて息も絶え絶えに屁古へこた垂れている汚らしいフォックス・テリヤだ。見忘れもしないこの間、山木コンクリート混凝土氏の玄関前から搔かつ攫さらった一件だ。

色男医学士

吾輩はツカツカとその金網に近づいてブルブル震えている犬を抱き上げた。犬さえ見付かれや他に用は無い。持つて帰つて山木テル子嬢に引渡せばいい……と思つて抱き直すトタン犬の肋骨がゾロツと手に触つたのでゾツとしてしまった。見るとアンマリ弱り方が甚しい。骨と皮ばかりになつてゐる上に、鼻の頭がカラカラに乾いてしまつて、瞳孔の開いた眼脂だらけの眼で悲しそうに吾輩を見上げてゐるが尻尾を振る元氣も無いらしい。一体これはどうした事かと、明るい窓の下へ持つて行つてよく見ると、弱つてゐる筈だ。咽喉を切り開いて金属製の鞆笛みたいなものを嵌め込まれてゐる。その小さいブリキ板の中央の穴からスウスウと呼吸をしているのが如何にも苦しそうだ。よくジフテリアに罹つた子供が、咽喉が腫れ塞がつて咽喉切開の手術をされたあとに嵌めてもらつてゐるアレだ。こうした鍼力製の呼吸孔の事を医学用語ではカニウレと云うのだが、和訳したら金属製咽喉笛とでもなるのかな。

さてはこのフォックス・テリヤ氏、UTA君はジフテリアにでも罹つたのかな。そうとすればこの容態ではトテモ助からない。おまけに熱も相当に在るようだが……弱つたな。黙つて持つて行くつもりだったが、コンナ容態では持つて帰るうちにグウタになつちまうかも知れない。ハテ、何とか方法は無いものか……と、ガタガタ震えてゐる犬を抱えてシ

キリに考えているところへ、背後から音もなく猫のように忍び寄って来て、吾輩の肩にソツト手を置いた奴が居る。振返つてみると、タツタ今考えていた当の本人の羽振医学士だ。悪いところへ来やがったと思つたが、しかし何度会つてもいい男だ。毛唐けとうで破廉恥バレんチノ脳という女たらしの映画俳優が居たがソイツによく肖にてている。頭をテカテカに分けて白い診察服を着込んでいる恰好はモウ立派な博士様だ。

「……今日は……鬚野先生。いい犬が見付かりましたかね」

「イヤ、今日は駄目だ。それよりもこの犬はドウしたんかい。ジフテリヤでもやったんかい」

「アツ、この犬ですか」

「知つとるのかい、この犬を……」

「存じております。一ヶ月ばかり前に頂戴しましたフォックス・テリヤで……」

「そうじゃない。この犬がどこの家の犬だか知つとるのかと云うんだよ……君が……」

「……………」

羽振医学士の顔がサツト青くなつた。どうやら知っているらしい眼の玉の動かし方だ。

「知らん筈はないじやろう。あの家の犬うちということを」

「存じません。ドコの犬だか……貴方がどこからかお持ちになったのですから……」

「この犬は山木テル子さんの犬だよ」

「へエ、山木テル子さん……存じませんな、ソナナ方……」

「ナニ知らん……」

「ハイ、まったく……その……」

「ウン、キット知らんか……」

「……ぞ……ぞんじません。そんな方……まったく……」

博士の卵が汽車の信号みたいに青くなったり赤くなったりした。しかし汽車の信号でも何でもモウ相場がきまつている。自分が結婚を申込んだ女の名前を忘れるようなウンテレガンが在るもんじやない。コイツは多分、この犬の名前がウータと行って、自分の恋こいがた敵き、唾川歌夫からテル子嬢に贈ったものである事もチャンと知っていやがるに違いない。そいつを承知でコンナ非道ひどい眼に合わせて、いい気持になつている事が吾輩にわかつたら事が面倒だと思つて、障さわらぬキチガイ崇たりなし式に、最初から警戒しいしい口を利いてい
るのだろう。コンナ誠意のない奴にあの親孝行無双の断髪令嬢を遣る訳には断然イカン。
「フン、知らんなら知らんでええ。その代りにこの犬の病氣を出来るだけ早く治癒なおせ」

「アツ。そ……そいつはドウモ……」

「出来んと云うのか」

吾輩の見幕を見た羽振医学士がブルブル震え出した。すこしずつ後退あとしぎりをし始めた。

「ハ……ハイ。それはソノ……結核の第三期にかかっておりますので……ハイ……」

「変な事を云うな。最初から第三期か」

「イエ。その最初が初期で……その次が第二期で……」

「当り前の事を云うな。筥べらぼう棒めえ。最初から結核だったのか、この犬は」

「ソ……それがソノ……実験なんで……」

「何の実験だ……」

「それがソノ……今までジフテリヤにかかって手遅れになりますと、咽喉切開をして、その切開した部分へコンナ風にカニウレを嵌めます。ところがそのカニウレの穴から呼吸すると色々な呼吸器病にかかる事がありますので……」

アンマリ真面目腐つて講釈をするもんだから吾輩はちよつと嘲笑あざわらつてみたくなった。

惜しい鼻柱

「フウム。このカニウレを嵌めた奴は人間でも犬猫でもこの通りチョット高襟はいからに見えるから、一つ流行はやらしてやろうかと思っていたところじゃが、そんなに有害なものかのう」

「人間の鼻というものは実に都合よく出来ておりますもので……」

「当り前だ。バレンチノだつて鼻で持つているんだ。羽振先生だつてそうだろう」

羽振先生、思わず自分の鼻を撫いでた。聊いささかバレンチノを自覚していると見える。

「その……当り前でして……鼻の穴の一番前に鼻毛がありまして、その奥に粘膜がありま
す。それから咽頭を通つて空気を吸込みますので、その間に色々な黴菌ばいじんや、塵埃ほこりが、鼻
毛や粘膜に引つかかつて空気がキレイになります上に、適当な温度と湿気を含んで、弱い、
過敏な咽喉を害しないように出来ておりますので……」

「ウン。成る程のう……ところで加賀の国の何代目かの殿様は、家老や奥女中から笑われ
るのも構わずに鼻毛を一寸以上伸ばして御座つたという話だが、アレは君が教えたのか」
バレンチノが長い、ふるえたタメ息をした。

「へエ。存じませんが……そんな方……」

「よく知らん知らんと云うのう。それじゃ鼻毛のよく伸びる奴は、大てい女好きで長生き

をするものだが……俺なんかは無論、例外だが……アレはやっぱホルモンの関係じゃないのか」

「サア、わかりませんが。研究中ですから……」

「そんな研究ではアカンぞ」

「ヘエ、相済みません」

「俺に謝罪あやまったって始まらんが……それからドウしたんだ今の話は……」

「ヘエ、何のお話で……」

「アタマが悪いのう君は……イクラか蓄膿症の気味があるんじゃないか君は……それともアデノイドか……」

「そんな事は絶対に御座いません」

「成る程、君はその方の専門だったね、失敬失敬。今の鼻毛の話よ。鼻毛は健康の礎もと……ホルモンのメートルだという……」

「ヘエ、そうなんで……ところがその咽喉に有害な黴菌や塵埃を含んだ乾燥したつめたい空気をこのカニウレから直接に吸込みますと、直ぐに咽喉を害しますので、そこへ色々な黴菌がクツ付いて病気を起します。この犬なども御覧の通り切開手術をしてやりませんと間

もなく結核を感染しまして……」

「成る程。それが実験なのか」

「左様さようで。切開手術の練習にもなります」

「フン。余計なオセツカイづくめだな。君の実験は……」

「どうも相済みません」

「よくあやまるんだな君は……とここでこの犬結核はドウなるんだ」

「ハイ。いよいよカニウレが有害な事がわかれば、その次には羽振式のカニウレを作りまして、決してソナ心配のないように致しますので……」

羽振学士の顔色が、ダンダンよくなつて来た。

「ふうむ。ソレ位の事で博士になれるのか」

「なれる……だろうと思いますので……」

「うむ。マアなるつもりでセイゼイ鼻毛を伸ばすがいい。ところで改めて相談するが、この犬の結核を何とかして治癒なおす訳には行かんのか」

「さあ。コイツは一寸ちよつとなおりかねます」

「博士になれる位なら、犬の結核ぐらいは何でもなく治癒せるじやろう」

「ハハハ。なんぼ博士になりましたも、コンナ重態の奴はドウモ……」

「モトモト君が結核にしたんじやないか……この犬は……」

「……そ……それはそうですけれども、治癒すとなりますとドウモ……」

「ふうむ。そんなら君は病気にかける方の博士で、治癒す方の博士じやないんだな」

「……そ……そんな乱暴なことを……モトモト実験用に買った犬ですから僕の勝手に……」

「……黙れ……」

「……」

「いいか。耳の穴をほじくってよく聞けよ。貴様は空そらとほ呆ぼけているようだが、貴様がこの

頃、婚約を申込んでいる山木のテル子嬢はなあ、この犬を洋行土産に呉れた唾川歌夫……

知っているだろう、貴様の恋敵に対して済まないと言つて、泣きの涙で目を暮らしている

んだぞ。その犬が自宅うちに居ないと歌夫さんに来てもらえないと言つて瘡やせる程苦勞してい

るんだぞ。その真情に対しても貴様はこの犬を全快させる義務があるんじゃないか。貴様

は貴様の愛する女の犬を結核に罹からせてコンナに骨と皮ばかりに瘡せ衰えさせるのが気持

がいいのか。それともこの犬が偶然に手に入ったのを幸いに、知らん顔をして実験にかけ

て弄なぶり殺しに殺して、唾川小伯爵と山木テル子嬢の中を永久に割さこうという卑劣手段を講

じているのか」

「……………そんな乱暴な……………メチャクチャです。貴方の云う事は……………ボ……………僕と……………そのテル子嬢とは……………マ……………全く無関係……………」

「ナニ卑怯なツ……………」

吾輩は思わず犬を放り出して羽振学士の横よこ面つらを力一パイ啖くらわせた。和製バレンチノが一尺ばかり飛上つて、傍の猫の籠の上にブツ倒れて、そのままグツタリと伸びてしまった。その拍子に鉄網かなあみの蓋が開いて、猫が二三匹ハヤテのように外へ飛出した。

吾輩はその猫と一緒に動物飼養場を飛出した。

アトから聞いたところによると羽振学士は、大切な鼻の骨が碎けて重態に陥ったので、早速、直ぐ近くの大学耳鼻科へ担かつぎ込んで、お手の物で修繕したので、間もなくモトの鼻以上の立派な鼻をオツ立ててピンピン歩き出したという事であるが、考えてみると殴った場所が悪かった。モット取返しの附かない処で、鼻柱を引べがつ剥がしておけばよかった。アんな卑怯な奴が博士になつたら何をするかわからない。

少々荒療治ではあったが山木断髪令嬢の愛犬UTAを中心として渦巻くピンク色ロマンスの半分は、これで片付いたようなもんだ。

吾々のルンペン道は甚だ簡明直截ちよくせつである。

名誉や金銭に縛られて心にもない妥協をしたり苟合こうごうしたり、腐敗したり、墮落したりして、純真な恋を踏み蹂にじつたり、引歪ひきゆがめたり、売物買物にしたりする紳士淑女たちの所謂わゆる、社交道徳なんていうものとは根柢シキが違うんだ。アツパカツトか……キツスか……この二つ以外に行く道はないんだ。天道様てんどうさまと青天井以外に頭を下げる者がいないから自然、物事がそうなるんだ。清浄潔白なもんだ。

吾輩はそうしたルンペン道の代表者である。ユキアタリ・バツタリ映画、オール・トーカー、天然色、浮出し、街頭ローマンスの名監督である。純真生きいっほん一本の恋以外には取上げない運命の神様である。だからその純真生一本の盲目の恋だったらいツ何時なんどきでも引受る。身分が何だ。財産が何だ。名誉が何だ。そんなものは犬に喰われるだ。丸裸になつて青天井の下で抱き合えだ。……アハハハ……と笑い出したら、そこいらで遊んでいた子供連がバラバラと軒の下へ逃込んだ。アハハ。少々キチガイじみていたかな。

裸体女四五人

ところで少々腹が北山になって来た。どこかで飯を喰って、将来の方針をトックリと一つ考えてみる事にしよう。何をいうにも羽振学士をナグリ飛ばして、肝腎カナメのUTA^{ウーター}を放^ほつたらかして万事を絶望状態に陥れて来たばかりのところ、将来の筋書がまだチツトモ出来ていないんだから困る。野球なら満^{フル}塁^{ベース}ツースリーというところだろう。ここで飯を喰って考えなくちゃ嘘だ。

籠^{べらぼう}棒^{ぼう}めえ、キチガイだつて腹は減るんだ。猿の出世したのが人間で、人間の立身したのがキチガイで、キチガイの上が神様なんだから、まだ全智全能とまでは行きかねる吾輩だ。腹が減って相談相手が欲しくなるのは当り前だ。

どこか美味^{うま}そうな安いものを売っている店はないか知らんとそこいらを見まわしたが、何しろ学校の近くだから見渡す限り本屋、文具屋、牛乳店、雑貨商みたいなものばかりだ。腹の足しになりそうな店なんか一軒もない。

ところがそこから二三十歩あるく中^{うち}に……見付かった。狭い横路地のズツと奥の行止り

の処に赤い看板が見える。近寄ってみると真赤な硝子がらすに金文字で「御支那料理」「上海シャンハ亭テイ」と書いて在る。どうせインチキの支那料理だろうと思つて近寄つてみると豈あにはか計からんや、インチキでない証拠に、店の張出し窓の処にワンタン十銭、シウマイ十銭、チャアシウ十銭、支那ソバ五十銭と書いた木札を立てて実物が陳列して在る。その上の棚に色んな形の洋酒の瓶がズラリと並んでいるが、コイツも本物とすれば大したものだ。

吾輩の咽喉のどがキューと鳴つた。先ず劈へきしやう頭のヒツトを祝するつもりで一杯傾けるかな。表の硝子扉がらすどを押して中に這入ると真暗だ。おまけにサインとしていて鼠一匹動かない。

コンナ飲食店はお客が這入ると直ぐに黄色い声で「イラツシャイ」と来ないと這入る気にならないもんだ。ドンナ名医でも病室に這入ると直ぐに「イカガデス」とニツコリしない奴は、病人の方でホツとしないもんだ……何かなんと考かんえながらアンマリ静かなので不思議に思つて、直ぐ横の自由蝶ちようつがい番ばんになつた扉をグーツと押開くと驚いた。

瓦斯がすストーブの臭気が火事かと思うほどパアツと顔を撲うつた。

同時に耳の穴に突刺さるような超ソプラノが、一斉に「キヤーツ」と湧わき起おこつたと思つと、若い女の白い肉体が四ツ五ツ、揚板をメくられた溝どぶねずみ鼠ねずみみみたいに、奥の方へ逃入にげいれんで行つた。

お客様を見てキヤーツと云う手はない。しかもダンダン暗がりに慣れて来た眼でそういったの後姿を見ると、揃いも揃った赤い湯もじ一貫の丸裸まるはだか体で髪をオドロ口に振乱しているのには仰天した。真昼まっぴるさ中なかから化物屋敷に来たような気持になってしまった。

部屋の中は天井から床まで赤づくめで、赤漆塗あかうるしぬりの卓が四ツ五ツ排列して在る間に、赤唐紙張あかとうしはりの屏風びょうぶが仕切つてある。その片隅の大きな瓦斯暖炉の前の空隙すきまに、籐とうの安樂椅子が五ツ六ツ並んで、五月だというのに瓦斯の火がドロドロと燃えている。

四壁に沁み込んだ脂肪と薬味の異臭が引切りなしに食欲をそそる。
やっぱり支那料理屋かな。

クシヤミ行列

めんくらつた吾輩がポカンとなつたまま部屋のマン中に突立っていると、奥の方の料理部屋らしい処で声がする。向うでは聞こえないつもりらしいが、よく聞こえる。今の女連中の声だ。

「……表の扉とをナゼ掛けとかなかつたの」

「困るわねえ。今頃来られちゃ」

「ああ怖かった。まるで熊みたい……ビツクリしちやったわ」

「まだ居るの」

「ええ。あそこに突立ってギョロギョロ睨にらみまわしているわよ」

「イヤアねえ。何でしょう、あの人……」

「あれルンペンよ。物貰いよ」

「誰か一銭遣って追払って頂戴よ」

「だってこの恰好じゃ出られやしないわ」

「お神さんどこに居んの」

「二階に午睡ひるねしてんのよ」

「お初ちゃん呼んで頂戴……一銭遣って頂戴……ね……」

「早くしないと何か持つてかれるわよ。早くさあ」

と云ううちにミシミシと二階へ上って行く足音がする。

きょうは妙な日だ。

百万長者の娘に平身低頭されて、支那料理屋の女に泥棒扱いにされる。

「ああ寒……急に寒くなっちゃった」

「ストーブの傍に居たからよ」

「……お寒い。風邪を引いちやった。フアックシン」

「あたしも寒くなっちゃった。ヘキスン……ヘッキスン……」

「ハックシン……フィックシイン。風邪が伝染ったよ」

「フア——クシヨオ——ン。ウハア——クシヨ——ン……コラ……」

「ホホホ。乱暴な嚏ねえ。アンタのは……」

「ああ。涙が出ちゃった」

「まだ洗濯物……乾かないか知ら……」

「一度に洗濯するのは考えもんよ」

「だって隙がなけあ仕方がないわ」

「あんまりお天気が良過ぎたのが悪かったんだわ」

二階から二人ばかり足音が降りて来た。

「呆れたねえ。何故表の扉をシツカリ締めとかなかったの……折角ヒトが良い気持ちで寝てたのに……フィックシイン……」

と云う女将らしい声がして、コック部屋兼帳場の入口の浅黄色の垂幕の蔭から、色の青黒い、まなじり 眦の釣上った、ヒステリの妖怪おほけじみた年増女の顔が覗いたと思うと、茫然として突立っている吾輩とピツタリ視線を合わせた。

「アラツ……先生じや御座いませんの……まあ……お珍らしい……よくまあ」

と云ううちに浅黄色の垂幕をから繋げて出て来た。生々しい青大将色の琉球飛白がすりを素肌に着て、洗い髪の櫛くし巻に、女たちと同じ麻裏の上草履うわぞうりを穿はいている。コンナ粹な女に識合いはない筈だがと、吾輩が首をひねっているにも拘かかわらず、女将は狂なれ狂れしく近寄つて来て、あふ溢るるばかりの愛嬌を滴したたらしながら椅子をすすめた。

拳骨辻占

「まあ……どうも飛んだ失礼を致しまして……場所慣れない若いものばかりなもんですから……お見外みそれ申しまして……さあどうぞ……ほんとにお久し振りでしたわねえ。御無沙汰ばかり……」

「馬……馬鹿云え。お珍らしいって俺あ初めてだぞ。お前みたいな人間には生れない前か

ら御無沙汰つづきなんだぞ……テンデ……」

「オホホホホホホ……」

女将の嬌笑が暗い部屋に響き渡った。その背後の浅黄幕の間から、ビックリ人形じみた女たちの顔が、重なり合って覗いている。

「オホホホ……恐れ入ります。まったく御座いますよ先生。この町中の水物屋で、先生のお顔を存じ上げない者は御座いませんよ」

「ハハア。俺に似た喰逃くいにげの常習犯でも居るのか……」

「まあ、御冗談ばかり……それどころでは御座いませんよ先生。先生のお払いのお見事な事は皆、不思議だ不思議だつて大評判で御座いますよ」

「ううむ。扱さては夜稼よかせぎ……という訳かな」

「そればかりでは御座いませんよ。いつも一杯めし上ると声色こわいろ使いや辻占つじうら売り、右や左なんていう連中にまで、よくお眼をかけ下さるので、そのような流し仲間では先生のお姿を拜んでいるので御座いますよ。先生は福の神様のお生れ変りで、いつもニコニコしておいになるから縁起えんぎがよいと申しましてね。どこの店でも心の中で先生のお出でを願っているの御座いますよ先生……」

「……ああ、いい気持ちだ。汗ビツシヨリになっちゃった。本気にするぜオイ……」

「嫌いやで御座いますよ先生。私がまだ十一か十二の時に、両親の病気を介抱かいごしたいしいコチラの遊廓あそびがらで辻占つじうらを売つておりました時分に……」

「アツ。君はあの時の孝行娘さんかえ。これあ驚いた。そういえばどこやらに面影が残っている。非道ひどいお婆さんになつたもんだね」

「まあ。お口の悪い……でも先生はあの時からチツトも御容おようす子がお変りになりませんわね。昔の通りのお姿……」

「アハハ。貴様の方がヨツポド口が悪いぞ。変りたくとも変れねえんだ」

「アラ。そんな事じゃ御座いませんわ」

「おんなじ事じゃないか」

「……でも、そのお姿を見ますとあの時の事を思い出しますわ。『ウーム。貴様が新聞に出ていた孝行娘か。こつちへ来い。美味うまいものを喰くわせてやる』と仰おっしゃ言いつて、お煙草盆たばこに結ゆつた私の手をお引きになつて、屋台のオデン屋へ連れてつてお酌しやくをおさせになるでしょう。それから私の手をシツカリ掴つかんで廓の中をよろけ廻りながら御自分で大きな声をお出しになつて『河内かわちイ——瓢箪ひょうたん山やま稻荷いなりの辻占ア——ツと……ヤイ。野郎……買かわねえ

か』と云う中うちに通うりすがりの御客を、お捕まえになるでしょう。あんな怖い事は御座いませんでしたわ。『何をパチクリしていやがるんだ籠べらぼう棒めえ。マックロケのケエの手習草紙おいらんみたいみさおな花魁おいらんの操みさおに、勿体ない親御様の金を十円も出しやがる位なら、タツタ二銭でこの孝行娘の辻占を買うつて行きやがれ。ドツチが無垢むくの真物ほんものだか考かえてみる。ナニイ、五十銭玉ばかりだだ。嘘うそを吐つけ。墓がまくち口くちを見みせろ。ホオラ一円札があるじやないか。コイツを一枚よこせ。釣銭つりせんなんかないよ。お釣つりが欲ほしかったら明日あしたの朝、絹夜具きんよぐの中で花魁おいらんから捻ねじ上げろ。ナニ、高価たけえ？……シミツタレた文句ぶんぐを云いうな。勿体なくも河内瓢箪山かんなひょうたんざん稲荷いなりの辻占つじざんだ。罰ばちが当あるぞ畜生ちくせい。運氣うんき、縁談えんだん、待人たいじん、家相けさう、病人びやうじん、旅立りょだての吉凶よしあし、花魁おいらんの本心ほんしんまでタツタ一円でピツタリと当ある。田舎一流拳げんこつ骨こつの辻占つじざんだ。親おやの罰ばちより靦てきめん面めんにアタル……この通うり……ポコーン……』とか何なにとか仰う言いつて、買かつてくれた人の横よこツ面つらを……

「ハハハ。そんな事ことがあつたつけなあ。酔よ払はつていたものだから忘れてしまつたわい」

支那料理

「あれから私いろいろと苦勞致しましたわ。両親に死別してから芸妓げいしやになったり、落語はな家の兄しかさんとくっついて料理屋を始めたや、それから上海に渡って水商売をやったりして、いくらか大きく致しておりますうちに、上海の戦争で亭主の行方がわからなくなりまして、御鼻ごひいき眞まことの旦那様からは見放されるしでね。いくらかスコ焼けになりました……先生にお隠かくししたって始まりませんから、眞実ほんとのところを申上げるんですけど……私を見放した人には怨うらみが残のこっておりますし、ここに居ります娘さん達が、私から離れませんかですから、一つ乗るか反そるかで日本へ帰りまして、やっと二三箇月前にこんな横よこツチヨへ店を開きましたのに、モウ先生がお出で下さるなんて縁起えんぎがいいどころじゃ御座ございませんわ。あたしや嬉うれしくって嬉うれしくって、胸むねがモウ一パイ……」

と云ううちに吾輩の胸むねへ縋すがり付きメソメソ泣き出した。

「いい加減かへんにしろよ。若い女たちが見てるじゃないか。モウ一遍俺の手に縋すがって辻占つじうらひを売りに出る年でもあるめえ」

「……これからもドウゾこの店の事を、よろしくお頼み申上ます……誰も……どなたも……相談相手さだめあてになつて下さる方がないのですから」

「フウム、成る程。そういえば何もかも新しいようだな。何だつてコンナ処ところに支那料理屋

なぞ作つたんだ」

「ホホホ。恐れ入ります。どうも表通りにはいい処が御座いませぬので、それに支那料理なんて申しますと、どうも横町じみた処が繁昌いたしますようで……」

「イカニモなあ、ところでホントに支那料理が在るのか」

「オホホ。御冗談ばかり。チャント御座いますわ」

「怪しいもんだぜ。真昼間、表を閉めて、女将さんが二階でグウグウ午睡ひるねをしている支那料理といったら大抵、相場はきまつてるぜ」

「ホホ。相変らずお眼鏡で御座いますわねえ。どうぞ御遠慮なく御鼻肩に……へへへ……」

「変な笑い方をするなよ。今日は飯を喰いに来たんだ。腹が減って眼が眩くらみそうなんだよ」

「……まあ……気付きませんで……御酒ごしゅはいかが様で……」

「サア。酒を飲むほど銭ぜにがあるかどうか」

「ホホホ。御冗談ばかり。いつでも結構で御座いますわ。見つくろつて参りましょうね」

「ウム。早いものがいいね。それから今のお嬢さん達もこっちへ這入って火に当らせたらどうだい。相手は俺だから構うことはない。裸はだか体ズレがしているルンペン様だから恥かし

い事はないよ。素裸すつばだか体の方が気楽でいいんだ。序ついでに生命いのちの洗濯をさしてやろう。面白い話があるんだから……」

「オホホ。あの子たちは今日お天気がいいもんですから、お客の少ない昼間のうちに申合せて着物のお洗濯をしているのですよ。その着換えが御座いませんで、仕方なしにゆもじ一つでストーブへ当っておりますところへ、先生が入らつしたもんですから、ビックリして逃げて行つたので御座いますよ。ホホホ。でもねえ、まさか先生の前に裸体で出られやしませんからね、若い女ばかりですから……」

「馬鹿云え。先祖譲りの揃いの肉襦袢にくじゆばんが何が恥かしいんだ。俺だつてこの二重マントの下は禪ふんじし一つの素つ裸体なんだぞ。構わないからみんなこつちへ這入らせろ」

「ホホホホホホホ。かしこまりました」

女将は嬌笑がせうしいしいイソイソとコック部屋へ引上げると間もなくポーンと瓦斯焔がすこんろへ火の這入る音がした。この家の支那料理うちは女将が自身で作ると見える。序ついでにヒソヒソと女達へお説教をしている声がハッキリと聞えて来る。

「サアサアみんな先生の処へ行つといで。あの先生を知らないのかい。鬚野先生と云つて有名な方だよ。トテモさつぱりしたお方なんだよ。弱い女や貧乏人の味方ばかりしてお

いになる福の神様なんだよ。先生に顔を見覚えて頂くだけでキットいい事があるんだよ」

「だって女将さん……」

「何ぼ何だつてこのままじゃあんまりだわ」

吾輩は隙^すかさず立上つて怒鳴つた。

「ナアニ構わん構わん。そのまんまでこつちへ這入れ。お前たちと話してみたいんだ。俺が今引受けている素敵なローマンズの話をして、お前たちの意見を聞いてみたいんだ。這入れ這入れ。這入つてくれ。風邪を引くぜ」

「……ほら……ね。あんなに仰言るんだから構わないんだよ。あの先生は人間離れした方なんだから。恥かしい事なんか無いんだよ」

「さあさあイラハイイラハイ。大人は十銭、子供は五銭、ツンボは無代償^ただ。吾輩がこれから自作の歌を唄つて聞かせる。ルンペンの歌だ。裸ん坊の歌だ。昭和十年の超人の歌だ。エヘンエヘン。さあさあ這入つて来たり這入つて来たり。

あああああああ

歌が聞きたけあア——野原へお出^いでエ——

青空の歌ア——恋の歌ア——

あああああああ

いのち
生命棄てたけア——満洲へお出でエ——

遠い野の涯エ——河の涯エ——

アハハハハ。どうだい。いい声だろう。出て来なけあ、まだまだイクラでも唄ってやるぞ。ハハハハハ」

ソツと聞いていた女たちが、一人一人恐る恐る眼をマン丸にして這入って来た。吾輩の歌に感心したらしく、気抜けしたような恰好で、吾輩の周囲まわりを取巻きながら、椅子に腰を卸おろした。

そうして一心に吾輩の姿を見上げている半裸の若い女たちの姿を見まわすと吾輩は、森の妖精ニンフに囲まれた半獣神バシみたような気持になった。

「いい声ねえ。おみつちゃん」

「上しゃんはい海かいにだつて居ないわ」

「惜しいわねえ。コンナに町をブラブラさして……ホホ」

……ソレ見ろ……と吾輩はすこし得意になった。イキナリ椅子から立上って山高帽を冠

り直したもんだ。

「エエ。こちらはJ O R K東京放送局であります。只今……エート……只今午後二時二十七分から、支那料理が出来上ります。空腹のお時間を利用して、昼間演芸放送を致します。演題は『街頭歌二曲』、最初は野尻雪情氏作『銀座の霧』、次は南原黒春氏作『赤い帽子』、デタラメ・レコード会社専属鬚野房吉氏作曲、自演……了々軒ストーブ前から中継放送……誰だい手をタタク奴は。

銀座の霧

夜の銀座にふる霧は　ほんに愛しや懐かしや
 敷石濡らし灯を濡らし　可愛いあの娘の瞳を濡らす
 夜の銀座にふる霧は　ほんに嬉しや恥かしや
 帽子を濡らし靴濡らし　握り合わせた手を濡らす

赤い帽子

この世は枯れ原ススキ原　ボーボー風が吹くばかり
 赤い帽子を冠ろうよオ——

赤い帽子が眞実の　タツタ一つの泣き笑い

道化踊りを踊ろうよオ——

ああくたびれた」

「お待まちどお遠様。やつとお料理が出来ました。御酒ごしゆは何に致しましょうか。老酒ラオチュ、アブサ

ン、サンパンぐらいに致しましょうか」

「ウワア。そんなに上等の奴はイカン。第一ぜに銭が無い」

「オホホ。恐れ入ります。御心配なさらなくともいいんですよ。これはJORKからのお礼ですから」

「そんなに煽おだてると今度は踊りたくなるぞ」

「どうぞ今日はお願いですから御存分に皆を遊ばしてやって下さいまし。さあさあお前達は何をボンヤリしているの……お酌をして上げなくちゃ」

「アハハハ。これあ愉快だ。裸一貫のお酌は天あまの岩戸いわと以来初めてだろう」

「妾わたしにもお盃を頂かして下さい」

「オイ来た。ところでお肴さかなに一つ面白い話があるんだが聞かしてやろうか」

「相済みません。先生にお酌を願って……どうぞ伺わして下さい」

「ウム。スレッツカラシの君が聴いてくれるとあればイヨイヨありがたい。アハハ、おこ憤るなよ。スレッツカラシというのは世間知りという意味だよ」

「面白いお話って活動のお話ですか」

「そんなチャチなんじゃない。ありふれた小説や芝居とは違うんだ。みんな現在、お前さんたちの眼の前で……この吾輩の椅子の上で進行中の事件なんだ。しかも、そこいらの活動のシナリオよりもズツト面白い筋書が現在こうして盃を抱えながら進行しているんだから奇妙だろう——」

「まあ。それじゃ妾たちもその事件の中で一役買っているんで御座いますか」

「もちろんだとも。しかもその筋書の中でも一番重要な役廻りを受持つて、これから吾輩を主役としたスバライシ場面を展開すべく、タツタ今活動を始めたばかりなんだ。モウ逃げようたつて逃げる事が出来なくなっているんだ」

「まあ。否でいや御座いますよ先生、おからかいになつちや……気味の悪い……」

「イヤ。断然、真剣なんだ。まあ聞け……コンナ訳だ」

吾輩はそこで今朝けさからの出来事を出来るだけ詳しく話して聞かせた。

「どうだい。みんなわかったかい。だから詰まるところこうなるんだ。今度の事件は一切

合財、みんな偶然の出鱈目ばかりで持ち切っているんだ。吾輩が断髪令嬢の御秘蔵の犬と知らずに掻っ払ったのも偶然なら、その犬を断髪令嬢の恋敵の医学士の所へ持って行って売付けたのも偶然だ。しかもその犬が世界に二匹と居ない名犬だったのも偶然なら、その犬が肺病の第三期にかかったのも偶然。そこへ羽振医学士が又、偶然に来合わせて、吾輩が振りまわす拳固を高い鼻の頭で受け止めたのも偶然だ。つまるところ、そこに神様の思召が働いているに違いないと思うんだが、ドウダイ議員諸君……」

議員諸君が顔と顔を見合わせ始めた。

「まあ……羽振っていう人は、あのウチへ来る医学士さんじゃないの……男ぶりのいい……ねえ女将さん」

「あのバレンチノさんよ。ね、お神さん。キットそうよ」

女将が眼を白くして首肯しながら襟元を突越した。椅子の上から一膝進めた。

「まあ。只今の先生のお話は、みんな本当に御座いますの」

「何だ。今まで作りごとだと思つて聞いていたのかい」

「……ド……どこに居りますの。その医学士は……憎らしい」

「オットット、そう昂奮するなよ。何も直接にお前たちと関係のある話じゃないだろう」

「それが大ありなんですよ、馬鹿馬鹿しい」

と女将が大見得おおみえを切った。

「ふうん。女将さんと関係があるのかい」

「あるどころじゃないんですよ、阿呆あほうらしい。あの羽振といったらトテモ非道ひどいカフェー泣かせなんです。男ぶりがいいのと、医学士の名刺に物をいわせて、方々のカフェーを引っかけまわって、この家うちにだつても最早もとう、二百円ぐらい引っかけりがあるんです。新しん店みせだもんですから、スツカリ馬鹿にされちやつたんですよ。口惜しいつたらありやしな
い」

「フーム。そんな下等な奴だつたのかい、アイツは……そんならモット手非道てひどく頼ほおげ桁たを
ブチ壊してやれあよかった」

「そして……ド、どこに居るんですか」

「多分、耳鼻咽喉科かどつかに入院しているだろう」

「……あたし行つて参りますわ。直ぐそこですから……ちよつと失礼……」

「ちよつと待て……」

「いいえ、棄てておかれませんか。今まで何度となく勘定書を大学に持って行つたんですが、

どこに居るかサツパリわかりませんし……タマタマ姿を見付けても案内のわからない教室から教室をあつちへ逃げ、こつちに隠れしてナカナカ捕まらないのですよ。入院していれば何よりの幸いですから……ちよつと失礼して行つてまいります」

「ま……ま……待て……待てと云つたら……いい事を教えてやる。確実に勘定の取れる方法を教えてやる。アイツは現金なんか持つてやしないよ」

「それはそうかも知れませんわねえ」

女将は、すこし張合抜けがしたように椅子へ引返した。

「それよりもねえ、彼奴あいつの親父の処へ勘定を取りに行くんだ」

「まあ。彼奴の家を御存じですの……それがわからないお蔭で苦勞うらちしているんですよ。誰なんですか一体、羽振さんの親御さんは……」

「知らないのかい」

「存じませんわ。教えて下さいな」

「あの有名な貴族院議員さ」

「まああああ——アアア」

五六人の女が部屋の空気を入れ換えるくらい大きな溜息をした。そのマン中に女将は頭

を下げた。

「ありがとう御座います鬚野先生……ありがとう御座います。それさえ解れば千人力……」
「ま……ま……まあ早まるな。相手の家はわかつて、なかなかお前たち風情が行って、おいそれと会つてくれるような門構えじゃないよ。万事は吾輩の胸に在る。それよりも落付いて一杯注げ……ああいい心持になった。どうも婆のお酌の方が実があるような気がするね」

「お口の悪い。若い女でも実のあるのも御座いますよ。ここに並んでおります連中なんか、上海でも相当の手取りですからね」

「アハハハ。あやまったあやまった。お見外れ申しました。イヤ全くこんな酒宴は初めてだ」

「日本は愚か、上海にも御座いませんよ」

「ところでどうだい。最前からの話の筋の中で、羽振医学士の方は、吾輩の拳骨一挺で簡単に型が付いた訳だが、今一人居る断髪令嬢の許嫁の小伯爵、唾川歌夫の方はドウ思うね、諸君。その親孝行の断髪令嬢のお婿さんに見立てて、差支え無いだろうか。吾輩は赤ゆもじ議員諸君の御意見通りに事を運びたいのだが……」

「ほんとに貴方は神様みたいなお方ですわねえ。何もかも見透して……」

「ところが、今度の事件に限って吾輩は、すこし取扱いかねているのだ。未だその断髪令嬢の涙ながらの話聞いただけなんでね。唾川小伯爵がドンナ人間だか一つも知らずにいるんだ。そこへ取りあえず羽振医学士にぶつかって、コイツはイケナイと気が付いたから、筋書の中から叩き出してしまった訳なんだが、しかし、これから先がどうしていいかわからないので困っているんだ」

「まったくで御座いますわねえ、わたくし共でも、見当が付きかねますわ」

「ウム。だから実は君等にこうして相談してみる気になったもんだがね、一つ考えてくれよ。いいかい。この吾輩が詰まるどころ運命の神様なんだ。そうして君等の指図通りにこの事件の運命を運んでみようと思つてこうして相談を打つて**ぶ**っているんだ。ドンナ無理な筋書でも驚かない。ドンナ無鉄砲な場面でも作り出して見せようてんだから、一つ大いに意見を出してもらいたいね」

「……センチ……ホントに**わたし**の考え通りにして下さる？」

吾輩の横に腰をかけていた一番若い、美しい、**きりまえがみ**切前髪の娘が瞳を光らして云った。

「するともするとも。キットお前達の註文通りに筋書を運んで見せるよ。実物を使って実

際に脚色して行くという斬新奇抜、驚天動地の世界最初の実物創作だ。喜劇でも悲劇でもお望み次第に実演させて見せる……」

「でもねえ先生……」

女将の横に居る肥ふとつちよの一番肉感的な女が、細長い眉を昂あげて、薄い唇を齧かした。

「あたし疑問が御座いますわ」

「あたしもよ……どうも初めっからお話に変なのよ」

「あら、あたしもよ」

「ほう、みんな吾輩の話に疑問があるって云うんだな。ふうむ、面白い。念のために断っておくが、俺はチツトばかりアルコールがまわりかけている。しかしイクラ酔っ払っても、話を間違えた事は一度も無い男だぞ」

「アラ、先生。そうじゃないんですよ。先生のお話がヨタだなんて考えてるんじゃないやありませんわ。先生のお話が真実百パーセントとして聞いても、あたし達の常識が受け入れられないところがあるから……」

「ウワア、こいつは驚いた。恐しく八釜やかましいのが出て来た。何かい、君は弁護士試験か、高文試験でも受けた事があるのかい」

「そんなことありませんわ。これだけ五人でお給金を貯めて上海の馬券を買って、スツカラカンになったことがあるだけですよ」

「イヤ、これはどうもオカカの感心、オビビのビックリの到りだ。君等にソレだけの見識があろうとは思わなかった」

「まったくこの五人は感心で御座いますよ。上海でこの店が駄目になりかけた時に、五人が腕に擦よじをかけて、旦那を絞り上げて日本へ帰る旅費から、この店を始める費用まで作ってくれたので御座いますよ」

「……吾輩……何をか云わんやだ。この通りシャツポを脱ぐよ。君等こそプロレタリア精神の生きツ粹すいだ。日本魂の精華だ。人間はそうなくちやならん。その精神があれば日本は亡びてもこの了々亭だけは残るよ」

「そんな事どうでもいいじゃありませんか先生。それよりも今のお話ですね」

「うんうん。どこが怪しい」

「怪しいって先生……その唾川歌夫っていう人も、いい加減気の知れない人ですけど、そのコンクリート市会議員の断髪令嬢っていうのが、一番怪しい人物だと思えますわ」

「ふうむ。これは驚いた。何で怪しい。この事件の女主人公ひろいんが怪しいとは言語道断……」

「あたし久し振りに日本に帰って来たんですから、今の女の人の気持はよくわかりませんけどね、ソナに内気な親孝行な人が、そんな年頃になるまで断髪しているものでしょうか……許嫁の人から貰った犬が居なくなつたといつて泣くような人が……」

「フウウム、これは感心したな。ナカナカ君等の観察は細かい。そこまでは考えなかつた」
「ええ、きつと眉唾もんよ、そのお嬢さんは……」

「あたし日本の断髪嬢嫌いよ、テンデ板に附いていないんですもの。汚ない腕なんか出して……」

「アハハ、これあ手厳しい」

「当り前よ。腕を出すんなら子供の時分から腕を手入れしとかなくちや駄目よ。イクラ立派な肉附きの腕だつても、葉巻のレットルみたいな種痘ほうそうのアトが並んでいたり、肘ひじの処ひじのキメが荒いくらいはまだしも、馬の踵かかとみたいに黒ずんで固つねくなって痛くも何ともないナンテいう恐ろしいのを丸出しにしているのは、国辱以外の何ものでもアリ得ないと思うわ」

「ヒヤア、これは恐れ入った。国辱国辱、正に国辱。銀座街頭の女はみんな落第だ」

「上海の乞食女やちにだってアンナのは一人も居やしないわ。どんな男でもあの肘の黒いトコ

を見たら肘鉄ひしてつを喰わない中うちに失礼しちゃうわ」

「断髪だつてそうよ。櫛目のよく通る日本人の髪を切るなんてイミ無いわ」

「まあ待て待て。脱線しちゃ困る。ほかの断髪嬢ならトモカク、あのテル子嬢の断髪なら、お母さん譲りだけあつてナカナカ板に附いているぞ」

「おかしいわねえ。そんなお母さんだったら娘さんはイヤでも反感を起して日本髪に結ゆうものだけど……妾わたしならそうするわ」

「ちよいと先生。その伯爵様つていうのも妾、何だか怪しいと思うわ。先生のお話の通りだつたら」

「フウン。容易ならん事がアトカラアトカラ持上つて来るんだな、これあ。どこが怪しい、名探偵君……」

「だつて、そんな冷淡な許嫁なんか恋愛小説にだつて無いわ。せいぜい一日に一度ぐらいは訪ねて来なくちや嘘よ」

「それにねえ先生。その断髪令嬢のお父さんのコンクリート氏が引っぱられてからというもの、一度もそのお河童かっぱさんの処に訪ねて来ないなんて、よっぽどおかしいわ」

「ねえ先生。これを要するにですねえ、先生」

女将はボオツと来ているらしい。しきりに舌なめずりをして眼を据えた。

「ウフウフ。これを要しなくたっていいよ」

「いいえ。是非ともこれを要する必要が御座いますわ。どうも先生の仰おっしゃ言る実物創作の筋書っていうのは、カンジンの材料テーマが二割引だと思えますわ」

「ヒヤツ。材料テーマとおいでなすったね。どこでソナナ文句を仕入れたんだい」

「あたしの二代前の亭主が小説家だったんですもの。自然主義の大將とか何とか云われていたんですけど、創作なんか一度もしないで、実行の方にばかり身を入れちゃって、とうとう行方知れずになったんですからね。材料テーマって言葉は、その悲しい置土産なんですの」

「ふむ。自然主義なら吾輩にもわかるが、とにかくこの創作を完成しなくちゃ話にならない」
「駄目よ先生。そんな創作無いわよ。モウすこし人物を掘下げてみなくちゃ。中心になっ
ているお河童さんの恋愛だって、本物だかどうか知れたもんじゃないわ」

「ウーン。そういえば何だか吾輩も不安になって来た。一つ探偵し直しに行ってみるかな」
「どこから探偵し直しをなさるの」

「さあ。そいつが、まだ見当が附いていないんだ。もう一度あのお河童令嬢に会ってもいい。犬のお悔みを申上げてお顔色拝見と出かけるかな」

「駄目よお、先生。又欺だまされに行くだけよ。第一印象でまいっていらっしやるんですからね、先生は……」

「ねえ先生。思い切つて小伯爵のお父さんか、お母さんに会つて御覧になつてはどうでしょう。そうして何も彼も打明けて、意見を聞いて御覧になつては如何いかでしょう」

「よし。それじゃ方針がアラカタきまつたから出かける事にしよう」

「まあお待ちなさいよ。そんな恰好で入らつたつて会えやしませんよ。伯爵なんてシロモノは……今電話をかけて来ますから……自動車おじを奢つて上げますからね」

「エツ。自動車を奢る？」

「ええ。羽振の居所を教えて下すつた、お礼ですよ。……まあ聞いていらっしやい」

女将が何かしらニコニコ笑つて立上つた。コック部屋の横の帳場に坐り込むと、電話帳を調べてから念入りにダイヤルをまわした。

特別に品のいいオリーブ色の声を出した。

「モシモシ、モシモシイ。唾川伯爵様のお宅でいらつしやいますか。ハイハイ、コチラはねえ、アノこちらはねえ、大学前の自働電話で御座いますがねえ……ハイハイ。私はねえ、唾川様の若様を存じ上げております女で御座いますがねえ……」

貞操オン・パレード

「あのモシモシ……私は或る女で御座いますがねえ。ホホホ。それは申上げかねますがねえ。アノ若様は……そちらの小伯爵様は只今、御在宅でいらつしやいますか。……ハイハイ。あの三週間ばかり前から御不在……あら、左様でいらつしやいますか……どうも相済みません。こちらはアノ。その若様の代理で御座いますがねえ。ハイ間違ひ御座いません。それでお電話を差上るので御座いますが……その若様の御身の上について大切な御報告を申上げたい事が御座いますので……ハイハイ。どうぞ恐れ入りますが伯爵様へ直接にお取次をお願い致したので御座いますが……ハイハイ。かしこまりました……」

女将は平手で電話口を蔽いながら、吾輩をかえり見てニタリと笑った。

「何だ小伯爵は失踪してるのかい」

「ええ。そうらしいんですよ。唾川家は大変な騒ぎらしいんですよ。今出て来た三太夫の慌て方といったらなかつたわ」

「ウム。よく新聞記者に嗅付けられなかつたもんだな」

「まったくですわねえ。でもコツチの思う壺ですわ」

「ウム。面白い面白い。その塩梅あんばいでは秘密探偵か何かガウンと活躍しているだろう」

「ウチ鬚野先生をスパイじゃないかと思つたわ」

「シツシツ」

女将が又電話口で話を始めたので皆シインとなつた。

「あの……伯爵様で御座いますか。お呼立ていたしました、ハイハイ。かしこまりました。それでは直ぐにこれからお伺い致します。イエイエ。決して御心配なことは御座いません。何もかもお眼にかかりますれば、すっかりおわかりになりますこと……あの誠に恐れ入りますが、わたくしお宅を存じませんから、そちらのお自動車を至急に大学の正門前にお廻し下さいませんか。あそこでお待ちして手をあげますから、ハイハイ。お自動車は流線スターの流線型セダン。かしこまりました。では御免遊ばしまして……」

「巧いもんだなあ。流石さすがは凄腕だ。上海仕込みだけある。流線スターといったら、東京に一つか二つ在る無しの高級車だぜ」

「アラ、乗ってみたいわねえ」

「ウフ。乗せてやるから一緒に来い」

「あたしも乗りたいわ」

「ウム。みんな来い。モウ着物は乾いたろう」

「アラ、厭な先生、乾ほしてんのは普段着よ。晴着はチャント仕舞つてあるわよ」

「ヨオシ。出来るだけ盛装して来い。貞操オン・パレードだ」

女たちが鬨とぎの声を揚げて喜んだ。

「鶴子さん。アンタはね、洋装がいいわ。出来るだけ毒々しくお化粧しておいでよ。伯爵様にお目見えするんですから……」

「アラ、女将さん。あたし怖いわ」

「怖いことあるもんですか。その方がいいのよ。妾わたしに考えがあるんですから……」

鶴子というのは一番最初に吾輩に口を利いた一番若い美しい娘であつた。

「まあ先生。ソナに酔払つて大丈夫？」

「大丈夫だとも。酔っている真似は難かしいが、酔わない真似なら訳はないんだ。キチンとしていれあいんだからね」

禿頭変色

吾々一行の姿を他人が見たら何と云うだろう。

葬式自動車みたいな巨大な箱車の中に、令嬢だか、女給だか、籠拔娼妓だか、マダム・バタフライだか、何が何やらエタイのわからない和洋服混交の貞操オン・パレードがギツチリ鮓詰めになつて居るその中央に、モダン鍾馗大臣の失業したみたいな吾輩が納まり返つて居るんだから、何の事はない一九三五年式大津絵だろう。

その一団を乗せた流線型セダンが音もなく迂り出すと、吾輩は急に睡くなってグーグーと居睡りを始めた。自分の鼾の音が時々ゴウゴウと聞こえる。女たちのクスクス笑う声や夢うつつに聞いている中に自動車がピツタリと止まったので、吾輩は慌てて女たちの膝を跨いで一番先に飛降りて扉をパタンと締めた。

「お前たちはこの中で暫く待つてろ。吾輩が談判の模様によって呼込んでやるから……」
と云い棄てるなりフラフラしながら玄関の石段を上った。待つていたらしい唾川家の家令だか三太夫だか人相の悪い禿頭が、吾輩の姿を見ると眼を剥き出して睨み付けた。睨み付けるのも無理はない。オリーブ色の声なんかどこを押したって出そうな面構えじゃない。たしかに人間が違つて居るに相違ないのだから……。

「貴方は……何ですか……」

「老伯爵閣下に会いに来た人間だ」

「……ナニ……」

と云うなり禿頭が腕をまくった。柔道の心得か何かあるらしい。吾輩の胸をドシンと突いたが、吾輩微動だにしなかった。向うに柔道の心得があればコツちにルンペンの心得がある。相手が用人棒だろうが何だろうが、身構えたら最後、金城鉄壁、動く事でない。

「……か……閣下は貴様のような人間に御用はない」

「ハハハ、そつちに用がなくともこつちにあるんだ」

「ナ……何の用だ……」

「貴様のような人間に、わかる用事じやない。人柄を見て物を云え。何のために頭が禿げているんだ」

禿頭の色が紫色に変わった。慌てて背後うしろの扉ドアにガツチリと鍵をかけた。

「会わせる事はならん」

「八釜やかましい」

と云うなりその紫色の禿頭を平手で撫でてやったら、非常に有難かったと見えて、羽織

袴のまんま玄関の敷石の上に引っくり返ってしまった。その間に吾輩は巨大な真鍮張りしんちゆうばの扉ドアに両手をかけてワリワリワリドカンと押し開けた。そこから草原くさはらみたいな柔らかな絨壇の上に上つて、背後うしろをピツタリと締切ると、外でワンワンワンとブルドッグの吠える声と、自動車の中で女たちの悲鳴を揚げて脅える声が入り交って聞えて来た。ブルドッグという奴はいつでも気の利かない動物らしい。

癩癩くらべ

そんな事はドウデモ宜い。吾輩はグングンと廊下に侵入した。暗い廊下の左右に並んでいる部屋を一つ一つ開いて検分して行く中に、一番奥の一番立派な部屋の中央に、巨大なロココ式ガラス張りのシャンデリヤが点つているのを発見した。

そのシャンデリヤの下に斑はんぱく白、長鬚ちようしゆのガツチリした面つらつきの老翁おやじが、着流しのまま安楽椅子に坐つて火を点けながら葉巻を吹かしている。写真で見たことのある唾川伯爵だ。七十幾歳というのに五十か六十ぐらいにしか見えない。嘗てかつの日露戦争時代に、陸海軍大臣がハラハラするくらい激越な強硬外交を遣やつ付け付けた男で、この男の一喝あに遭うとい

い加減な内閣はひと縮みになったものだから痛快だ。成る程、掛矢かけやでブンなぐつても潰れそうもない面構えだ。取敢えず敬意を表するために、吾輩は山高帽を脱ぎながらツカツカと進み寄つて、恭しく頭うやうやを下げた。

「……キ……貴様は……何か……」

まるで頭の上に雷が落ちたような声だ。頭を上げて見ると伯爵は安楽椅子から立上つて、吾輩を真白な眼で睨み付けている。露国の蔵相、兼、外相ウイツテ伯を縮み上らせた眼だ。しかし吾輩は、わざと哄笑してみせた。

「アハハハ、私は鬚野房吉というルンペンです」

「……ナ……何だルンペンとは……」

「ルンペンというのは独逸語ドイツです。独逸語で檻樓ぼろの事をルンペンというところから、身なりとか根性とかがボロボロに落ちぶれた奴の事をルンペンというようになったのです。御存じありませんか。日本にも勲章を下げて、立派な家うちに住まったルンペンが、イクラでも居りますよ」

伯爵は立腹の余り口が利けなくなつたらしい。葉巻をガチガチと噛んで、鬚をビクビク震わせている。

吾輩は、すこし気の毒になったから、心持ち言葉やわらを柔やわらげた。

「伯爵閣下、実は今日お伺い致しました理由は、ほかでは御座いません。御令息の唾川歌夫君の事についてです」

「黙れっ……黙れっ……吾輩の家庭の内事は吾輩が決定する。貴様等如きの世話は受けん
ッ……ッ」

吾輩はここに到つてカンシヤク玉が破裂した。この老翁おやじは外交問題と家庭の内事をゴツ
チャにしている。ドンナ豪えらい人間でも、自分の妻に関する事を他人から話出されたら一応
は頭を下げて傾聴すべきものだ。

「ええこの馬鹿野郎。貴様等如きとは何だ。吾輩はこれでも一個独立の生計を営む日本国民だぞ。聊いささかの功績を云い立てにして栄位、栄爵を頂戴して、無駄飯を喰うのを光榮として
いるような国家的厄介者とは段式が違ちがうんだぞ。日露戦争の時には俺の発明した火薬ろすけが
露助ろすけにモノをいったんだぞ。日本の医学は吾輩の努力の御蔭おかげで、今日の隆盛きたを来きたしている
んだ。しかも吾輩は国家に何物をも要求しない。毎日毎日この通りのボロ一貫で、途みちに落
ちたものを拾いつて喰くつてゐるんだ。苟いも君のためや、親子兄弟、妻子朋友のためになる事な
らば無代償で働くのが日本国民だ。伯爵が何だ。正三位が何だ。そんな乾ひからびた木み乃伊いら

みたいな了簡だから、^{せがれ}伴が云う事を聴かないで家^{うち}を飛出すのだぞ」

女将の凄腕

多分顔負けしたんだろう、伯爵閣下は、よろよるとよろめいて背後^{うしろ}の椅子にドシンと尻餅を突いた。病み犬が逃げ吠えするように、モノスゴイ眼で吾輩を睨んだ。

「黙れ、伴は家風に合はん女を貰おうとしたから余が承知しなかつたのじゃ。出て行けと云うたのじゃ」

「へへ。伴は喜んだろう。コンナ店^{たなざら}曝しの光栄を引継いで、一生無駄飯を喰うのを自慢にするような腐った根性は今の若い者は持たないのが普通だぞ。又コンナ家^{うち}に嫁入つて来て、コンナ家風に合うような女だったら、虚栄心だらけのお茶っぴいか。魂のない風船娘にきまつているんだ」

吾輩がここで滔^{とうとう}々と現代女性観を御披露しようとするところへ背後^{ドア}の扉がガチャリと開いて、^あ思いもかけぬ警官が二人威儀を正して這^{はい}入つて来た。伯爵閣下^{うやうや}に恭しく敬礼すると、物をも言わず吾輩のマントの両袖を掴んだものだ。多分正気付いた家令が電話でもか

けたんだらう。

「何をするんだ」

と吾輩は二人の顔を振返つたが、二人とも吾輩を知らない新顔の警官らしい。やはり無言のまま無理やりに吾輩を引っぱって行こうとしたが、そのはずみに吾輩のマントの両袖がスツポリと千切れて、二人の巡査が左右に尻餅を突いた。吾輩は思わず噴出した。

「アハハハハ。飛んだ景清かげきよのシコロ引きだ。これが泥棒だつたらドウなるんだい。ハハハハハ」

「ホホホホホホホホ」

「ほほほほほほほほほほ」

思いがけない大勢のなまめかしい声が聞こえたので、ビックリして振返つてみると、自動車の中に待たせておいた連中がゾロゾロと這入つて来た。洋装、和装、頬紅、口紅、引き眉毛きまゆげ取り取りにニタニタ、ヘラヘラと笑い傾けながら、莊嚴を極めたロココ式の応接間に押し並んだところは、どう見ても妖怪だ。その妖怪中の妖怪とも見るべき上海亭の女将は、唾然となつている警官を尻目にかけてながら、しやなしやなど歩み出て恭しく伯爵閣下に一礼した。

「オホホホ、ずいぶんお久し振りで御座いましたわねえ、伯爵様。先年北支那の王魁石さんと秘密に上海でお会いになった時には、手前共の処を大層御鼻下さいまして、ありがとう御座いました。あの時に御引立に預りました娘たちを御覧遊ばせ、皆もうコンナに大きくなりましたして御座いますよ。あれから間もなく私どもは上海を引上げまして、コチラの大学前に、店を開きましたので、その中^{うち}に一度は御挨拶に出なくちやならないならぬと存じながら、つつい御無沙汰致しておりましたが、今日は又思いがけなく、コチラの若様の事で、是非ともお伺いしなければならぬ事が出来ましたので、序^{ついで}でと申しては何で御座いますか、みんな引連れて御伺い致しましたような事で御座います。オホホホホ」

老伯爵は棒立ちに突立ったまま、眼を白黒させて唾液^{つばき}を嚙んだ。吾輩も余りの事に、棒立ちに突立ったまま、唾液^{つばき}を嚙まざるを得なくなつた。

言語道断

「私が若様を存じ上げていると申しましたら不思議に思召^{おぼしめ}すで御座いましょう。ところが若様は流石^{さすが}にチャキチャキの外交官でおいで遊ばすのですから抜け目は御座いませぬ。伯

爵様が、私どもの店を御鼻屑おっしやになっております事を、よく御存じでね。外務省の御用で上海へお出でになるたんびにお父様の御遺跡を御覧になりたいと仰おっしゃ言いって私どもの処へお立寄りになりましたので、私どもでも特別念入りに御世話申上げましたところが、大層御意よいに叶かないましたらしく、ずっと引続いて今日まで御引立こうむを蒙まかっているのです。御座いますよ。ホホホホホホホ。

……そう致しましたらね。私どもがコチラへ参りましてからの事で御座いますよ。若様が、わざわざ私どもの処へお運び下さいまして、コンナ御相談をなさるので御座います。……自分が仏蘭西フランスから帰のちつた後に、山木という市会議員のお嬢さんのテル子さんと仰言いる方と婚約していたら、その山木さんが疑獄で別荘にお出でになつたとかで、伯爵様が、そのお嬢様との婚約を諦めてしまえ、羽振さんからの婚約の申込を受けると仰言いって、どうしても御承知にならない。一方にそのお嬢様のおウチではお母様が腦の御病気で入院なすつて、当分お帰りになる見込がなくなつた上に、お父様のお妾めかけさんだか何だかわからない女が、凶々しく家政婦とか何とかいって乗込んで来てお嬢様のテル子さんを邪魔にするので、テル子様は泣きの涙で暮しておいでになるのが若様としては見ぢやいられないが、これはドウしたらいいだろうと仰言いって、私に御相談が御座いました」

「ううむ。怪しからん奴だ。親に相談すべき事を……ううむ」

と老伯爵が唸った。こうなると伯爵もへつたくれもあつたものじゃない。父親としての面目までも、丸潰れの型なしだ。しかし女将は一切お構いなしで、持って生まれた一瀉千里のペラペラを続けた。

「ホホホホホホ、ほんとに怪しからないお話で御座いますよ。こうした行き違いのソモソモがどこから始まつておりますか、私どもは無学で御座いますから、わかりませんが、とにかくこれは容易ならぬ伯爵家の大事件と存じましてね。万一このようなお話が、外へ洩れるような事があつては大変と存じましたから、わたくしの一存で、色々と苦心致しました揚句、山木さんのお留守居の人達に承知させまして、手前共の店に居ります娘たちの中で一番お嬢様によく肖ておりますツル子と申します女優の落第生を、山木さんの処へ換え玉に入れて世間体をつくろいまして、お嬢様を私の処へお匿まい申上げました。そう致しまして外務省から病氣休暇をお取りになったコチラの若様と御一緒に、お好きの処へ新婚旅行にお出し申ししましたが、もう十分にワインド・アップがお済みになって、東京のどこかへお帰りになつてゐる筈で御座いますよ。近頃のお若い方は何でもスピードアツプなさるのがお好きで御座いますからね」

「ううむ。いよいよ以てケシカラン……」

伯爵ネギリ倒し

「ホホホ。そう致しましたら何しろタツタ一人のお世継の事で御座いますから、伯爵様がキット若様をお探しになるに違いない、その御心配の潮時を見計みはからいまして、私がコチラへお伺い致しまして、万事のお話を拝聴致しまして、失礼では御座いますが御家の御為になりますように取計らいたいと存じた次第で御座いますかね。まことに怪けしからぬ御恩報じとは存じましたが、無学な私どもの才覚には、ほかに致しようが御座いませんでしたの
でね、ホホホ」

「……………」

「ところが、そのうちに私の処から換え玉に這入っておりますましたツル子と申します女が退屈の余りで御座いましょう。ツイ芝居気を出しましてね。お嬢さん生活の退屈しのに、そのテル子さんの大切な犬が盗まれているのを、この鬚野先生に取返して下さるようにお頼みしたところから事が起りまして、とどのつまり、鬚野先生が私どもの処へ偶然お乗込み

になつて、こちらの小伯爵様とそのテル子嬢を御一緒にするかどうかという御相談がありましたから、これは何よりの事と存じまして、こうしてお伺い致しました次第で御座います。如何で御座いますでしょうか。この御縁談を御承知下さいませでしょうか。新聞種になんかおなりになりませぬ中に、御承知になりました方が、御身分柄お得意じゃないかと考えるので御座いますが、どのようなもので御座いますでしょうか」

今度は吾輩が驚いた。老伯爵の次には吾輩がペシャンコになつてしまった。これ程手厳しく一パイ喰わされた事は未だ曾てない。彼の断髪令嬢が真赤な掴ませものであろうとは……：：：：：そうして真実に一切を支配している運命の神様がこの吾輩でも何でもなかつた。この上海亭の女将であつたらうとは……。

況んや老伯爵に到つては徹底的にペシャンコになつてしまつたらしい。真青になつて椅子の中に沈み込んでしまつたのは気の毒千万であつた。左右を見ると二人の警官はいつの間にか部屋を迂り出てしまつている。

そこで吾輩は改めて老伯爵の前に進み出た。

「どうです伯爵閣下。御名誉とか、お家柄とかいうものばかり大切がって、切れば血の出る若い生命の流れを軽蔑なさるからコンナ事になるのです。倅には内兜を見透かされ

る、女将には冷やかされる……」

「アラ、冷やかしなんかしませんわ。勿体ない」

「これぐらい冷やかしゃ沢山だ……」

老伯爵はポロリポロリと涙を流し始めた。頬の肉をヒクリヒクリと引釣ひきつらせながら、哀願するように女将の顔を見上げた。

「いや、わしが悪かった。わしが悪かった。ところで侘はどこに居る」

こうなると老人はみじめだ。何よりも先に考えるのは我児わがこの事だ、ここまで来ると、ルンペンも華族もタダの人間だ。

「ホホホ御安心遊ばせ、伯爵様。若様は最前から……」

と云ううちに部屋の入口に並んでいる女たちを押分けて、スマートな旅行服の青年が颯さと這入つそって来た。

「お父様、只今。お話は最前から廊下で承つておりました。御心配かけて相済みません。上海亭から別の自動車で追っかけて来ておりました」

「おお帰ったか」

老伯爵の両眼から新しい涙が溢れ出した。

「そうして……その……花嫁はドコに居る」

女将が振返つて、背後うしろに並んでいる五人の女を見渡した。するとその中から顔を真赤にした洋装の一人がおずおずと進み出て、老伯爵に向つて一礼した。最前上海亭で一番最初に吾輩に質問を試みた鶴子だ。唇と頬ペタを紅べにガラ色に塗つて、見事な腕を肩の上から露出しているところは誰が見ても街の女としか思えない。

老伯爵は眼を剥むいた。眼を剥く筈だ。花嫁が淫売姿で堂上どうじょう方へ乗込むなんて手は開か闕いびやく以来なのだから……。

「アハハハ成る程。これじゃイクラ探してもわからないじやろう。イヤ、お嬢さん、知らんで失礼したの……」

吾輩がシャツポを脱ぐと、令嬢も媽にこやか然にお礼を返した。

「わたくしこそ……でも色々と御親切に、ありがとうございますわ」

土管の中へ

「イヤ、名優名優。吾輩の前で、あれ程、シラを切っていた腹芸には感服した。その調子

なら立派な伯爵夫人としての役もつとまるに違いない。ナアニ華族社会の女なんてものは偶然に取り当った地位を自慢にして、自分以外の女を如何にして軽蔑しようか、蹴落けおとそうかという事ばかり寝ても醒めても忘れていない下等動物でしかあり得ないのだからね。しかもその御主人の栄位栄爵というのも、先祖が関ヶ原あたりで豊臣家に裏切った手柄で、徳川將軍から貰った大名の地位が変形したものに過ぎないのだからね。これに反して市会議員となると何もかも独力で成り上ったのだから堂々たるものだ。その点からいうと華族なんぞより身分が上だ。唾川のお父さん、この花嫁を仇あだやおろそかに思うてはなりませんぞ」

小伯爵が横合いから吾輩の手を握った。

「イヤ、鬚野先生……どうもありがとう。実はあの上海亭の二階で貴方のお話を聞いているうちによつぽど飛出してお礼を申し上げようかと思つたんですが、万一貴方が、親爺の廻し者だつたら大変と思つて……プツ……」

小伯爵は慌てて口に手を当てた。眼を丸くして老伯爵をかえりみた。老伯爵が不承不承に疎まばらな歯を露あらわして笑つた。

「アハアハアハ。何でも宜ええ。これから仲よくしてくれい」

吾輩は黙ってシャツポを脱いで、袖のないマントの肩で風を切って、豪華な応接間を出て行きかけた。

安心したので急に酔いが上がって来たものらしい。フラフラしながら扉ドアにぶつかった。

「おお、鬚野君。まあええじやろ、ゆつくりして下さい。一パイ差上げるから」

「先生。御ゆつくりなさいませよ」

「イヤ、モウ運命の神様は辞職だ。アトは女将によりしく頼むわい」

「そう云わずとこの家うちに泊って行つてはドウかな」

「この家は暑いです。イヤ、若夫婦万歳」

吾輩は廊下の空間を泳ぐようにフラフラしながら表に出ると、流線スターのセダンが待っていたので、その中に転げ込んだ。動き出すと運転手が聞いた。

「どちらへ……参りましょうか」

「帝国ホテルだ。……その帝国ホテルの裏手の空地になあ……その空地に並んでいる土管の右から三番目の入口へ着けてくれい。ああ、愉快だ。赤い帽子を冠ろうよ才だ。アツハツハツハツ。皆さん左様なら……」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1991（平成3）年12月4日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、「関ヶ原」は小振りに、「一ヶ月」は大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年12月6日公開

2006年3月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

超人鬚野博士

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>